昭和副讀本 巻二

4a
810
昭6

41702
教科書文庫
4
810
41-1931
20000
90687

昭和六年一月三十日
文部省檢定濟
中學校國語科教科用

保科孝一編

昭和副讀本

広島大学
教
90687
図書

育英書院發行

資料室

4a
81B
BB6

昭和副讀本　卷二目次

若山牧水
一　山上の湖へ……一
二　作歌に就いて……一四
三木露風
一　春の旅情……二七
菊池寛
一　船醫の立場（自修文）……三〇
幸田露伴
一　牛……五二
二　雑草……五五

大町桂月
一　三人一兩損……五七
二　冷汗記……六四
與謝野晶子
一　蜂……七一
吉江孤雁
一　霧……七三
二　翼……八〇
芥川龍之介
一　トロッコ（自修文）……八六
高濱虚子
一　佛法僧鳥……九九
二　柿二つ……一一四

正岡子規
一　近郊の秋色……一二三
二　果物……一二八
國木田獨歩
一　御最期川……一三二
二　忘れえぬ人々……一三五

昭和副讀本　卷二

若山牧水

名を繁といひ、明治十年宮崎縣臼杵郡坪谷村に生れた。早稲田大學卒業の後、歌人として名聲を得た。歌集・隨筆・紀行・歌話の著書が多い。昭和三年歿す、年五十二。

一　山上の湖へ

前橋から赤城の麓を廻り、澁川で乘換へて伊香保に向つた。この邊は、昨年の秋、利根の上流へ行つた時通つた記憶がまだ新しい。

澁川から伊香保まで登つてゆく歩みの遲い電車の左右は、

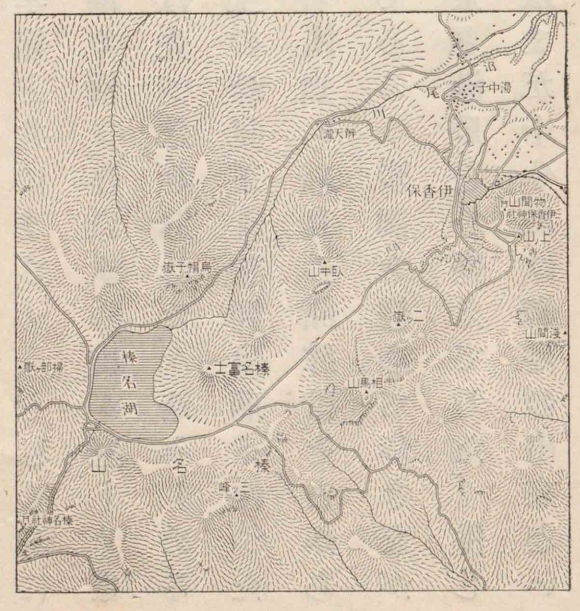
前橋
群馬縣前橋市

全く若葉の世界である。東京附近よりは一月近くも季節が遲いらしく、若葉の色もまだ柔で、間々藤の花が見え、山畑の隅には桐が咲いてゐる。

伊香保を足早に通り過ぎた。家並を出はづれると、忽に山路になつた。そして深い青葉・若葉の茂みの中から、種々樣樣な鳥の聲が一齊に降つて來た。

今度無理をして、山へ〳〵と念じて來たのも、實はこの鳥の聲が聞きたいばかりであつた。私は山深い處に生れて、幼い時からこの深山の鳥の樣々な聲に親んで來た。そしてどうしたものか、春の鳥よりも、秋から冬へかけての鳥の聲よりも、この若葉の頃に啼く鳥に、强く心を引かれる習慣を

つけて來た。初夏の風物は一體に私は好きであるが、眼前の若葉の色を見るにつけ、先づ思ひ出されるのは、山深く棲む樣々な鳥の聲である。昨年も丁度この頃、私は山城の比叡山に登つてゐた。十日程そこの山寺に籠りながら、朝夕に啼くその聲々を聞いて、どれだけ私の心を澄まし、魂を休めたであらう。日もさゝぬ樹立の深いなかで、眼をつむつてそれに耳を傾けてゐると、久



しく忘れてゐた自分といふものに、思はずもめぐりあつた様な哀しさ樂しさを、しみ〴〵と身に覺えたのであつた。痛い様なその記憶が、この季節と共にまざ〳〵と私の身に蘇つて來た。そして心の渇く様に、ひたすら山が戀しくなつたのであつた。その望は先づ達せられた。踏みしめる路は微なしめりを帶び、眼上の峰、見下す谷間は、萠えたつた若葉に渦卷き、種々様々の名も知らぬ鳥の諸聲は、そこから溢れ出て私の身を刺すのである。歩調を緩めて歩きながら、私は此の頃に珍しい緊張と滿足とを覺えてゐた。併しそれらの小鳥の聲では、私はまだ十分には滿足の出來ない何物かを心の中に持つてゐた。

井條風
碁盤目形の格子のやうな形

若葉の潤葉樹の林は長くは續かなかつた。やがて松や落葉松が、井條風に植込まれた、まだ年の若い植林地帶にたどりかゝつた。深山らしい小鳥の聲もそれと共に盡きて、とびとびの松の梢に頰白の啼くのが聞えた。空は晴れて、くすぶつた日光が山から山へ射して來た。路は溪と分れて、無邊際とも思はれる廣い乾き切つた松林や、落葉松林の間に入つたのである。用心のために前橋の友人から借りて著込んで來た冬シャツや肌著から、終には羽織の裏までも濕る位に汗が湧いて來た。

或眞直な長い坂の中途であつた。ふとある聲が私の耳に通じて來た。立留つて耳を澄してゐると、やがてその聲は

續いた。「くわつくわう――くわつくわう」まさしく彼の聲である。

「あ」と思はず息を呑んだ。そして眼を見はつてその聲の方角をたづねると、なだらかに傾斜した山肌が、大きく幾つも起伏して先から先へと續いてゐる。淡い日光を浴びた若松は、何となく薄赤みを帶びて、唯寂然とひそまつてゐる。寂しい聲は、淺い海の様なその林の何處からか起つて來るのだ。

「あ、あ」私はうめく様に幾度か低い聲を出して、身體のどこからともなく湧いて來る感動を抑へた。そして強ひて心を靜に保ちながら、白茶けた坂を登つて行つた。

「ほつたんかけたか、ほつたんかけたか」

かうした烈しい啼聲が、また突然私の頭上を通り過ぎた。杜鵑である。しかもつい私の身近に落ちて、その聲は停つた。

「ほつたんかけたか、ほつたんかけたか」

やがてまた直に續いた。よく透かせば、その姿も見えさうに思はれる處からである。私はひつそりと、路傍の青い草の上に坐り込んだ。

「ほつたんかけたか、ほつたんかけたか」

「くわつくわう、くわつくわう」

私は終に仰向けに草の上に身を伸した。そして雙方の掌

をきつく顔の上に置いて眼を閉ぢた。

二つの聲は、一つは近く一つは遠く、時にはかたみがはりに、時には同時に、間斷なしに聞えて來た。何とも云へぬ靜寂と光明とが、その聲に聽入つてゐる私の身邊をしつとりと包んだ。山はたゞその跡の聲のためにかすかに息づき、ひそまり返つてゐる四邊の松の木は、たゞそのためにほのかに光を放つてゐる樣にのみ私には思はれて來た。

あゝ、鳥は啼く、鳥は啼く。

私はまた別の鳥を聞いた。釣瓶打に打つ樣な、始なく終もない、やるせないその聲、光から生れて光の中へ、闇から闇へ消えてゆく樣なその聲、筒鳥の聲である。

多くの鳥の中で、筒鳥と郭公と、そして杜鵑と、この三つの鳥は、いつからとなく私の心の中に寂しい巣をくつてゐた。私の心が空虛になる時、私の心が渴く時、彼等は啼いた。私の心がさびしい時、あこがれる時、彼等は啼いた。私の心が何かを求めて動く時、疲れてそこに横たはる時、彼等は私と同じ心で、私の心にそのまことの聲を投げてくれた。それらの私の心の親友たちは、いま明るい日光にひたされた松の林のかうしてゐる私の眼の前で、聲を揃へて啼いてゐる。あゝ、まことに啼いてゐる。

私は非常に疲れて起上つた。眩しい日光に何となく羞しさを覺えながら、醉つた者のやうにふら〳〵歩み出した。

山上の湖
榛名湖

鳥どもは遠く離れ〳〵になつてまだ啼いてゐる。一時の興奮の去つた後に聞く彼等の聲は、更にまた別種の寂寥を帶びて、そこ〻から聞えて來るのである。疲れては居るものの、私はや〻足を急がせた。そして程なく意外の光景を見出した。

伊香保から山上の湖まで二里といふ山路は、たゞひたすらに登るものだとばかり考へてゐた。そしてかれこれ一里餘も來た時、或峠らしい處に達した。急ぎ足にその峠を過ぎようとして驚いた。思ひがけぬ平原が、かすかな傾斜を保ちながら、廣々と前方に打開けてゐたのである。平原の四方には、四つ五つの鋭い峰が、多くは頂上に岩を露出して、

阿蘇火山
熊本縣

各自獨立に聳えてゐる。

榛名富士と湖

その中で最も高く見えるのが、形から推して榛名（ハルナ）富士と呼ばれる山であらう。この平原は古の大噴火口の跡で、その火口が次第に狹まりながら、幾個處にも分れて火を噴くやうになり、その一つ一つが峰となつて殘り、この榛名富士の一峰が、最後まで活動してゐたのであらう。かういふ火山の形を、私は阿蘇火山に於て見たことがある。阿蘇は現に煙

をあげてゐるが、この死火山の頂上に登つて來て、私ははからずもこの平原を見出したのである。原の夏はまだ極めて淺いものであつた。白茶けた熊笹が茂り、去年の草の蔭にわづかに青みを見せて雜草が萠え、その間に柏と見える老木が諸處に散在して、漸く芽をふかうとしてゐる。つゝじの花が、熊笹や枯草の間にたゞこれだけは鮮に燃えてゐるやうであるが、これとてもまだ蕾がちであるらしい。見渡す限りたゞ茫漠たる原の上に、これはまた夥しい雲雀の聲である。よく聞けば、その聲は天からばかりでなく、地からも起る。人を怖れぬ山上の雲雀達は、強ちに蒼天高く舞ひ昇らずとも、新しいその巣に籠りながら、心ゆくばかり各

自の歌をうたふことが出來るのであらう。ぼんやりと、この景色に見とれてゐた私は、夥しい雲雀のなかに混つて聞えて來る郭公の聲を聞いた。首を垂れて聞いてゐると、それはこの廣い野の端の方から起つて來る。煙り渡つた薄雲は、靜に原一面の上に垂れて雲に映射し、原に照る日も煙のやうである。とび〳〵に立つてゐる裸山、その嶺の險しい岩、それらの山に圍まれた大きな窪みをなすこの寂しい原、この原のどこにひそんで彼の鳥は啼くのか。聽入れば、その聲すらも、今はまた煙のごとくに原のをちこちを迷うてゐるのである。

原の中央を貫いて、私の歩む路は眞直に續いてゐる。ぼん

やりと一里近くも歩いて行くと、やがて白い光を帶びて、榛名富士の麓に低く横たはる湖が見えて來た。心靜に湖の空を圍んで茂る樹立を眺めてゐると、そこに一軒こゝに二軒の人家が建つてゐるのを見出した。それはまさしく、今夜ゆつくりと、この疲れた身體を眠らすべき旅宿湖畔亭である。

（比叡と熊野）

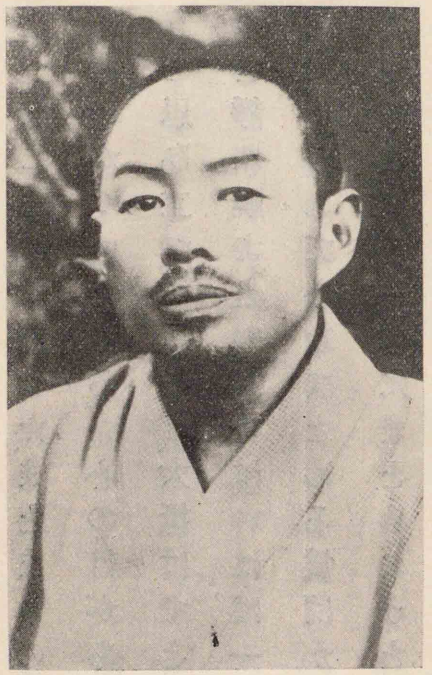
二　作歌に就いて

歌が作りたいといふ氣持がして、さて作る手蔓を得るに苦む場合がある。その時には、手帳を懷にして戸外に出るがよい。作りたいといふ一種の醱酵した氣持の時、眼に觸れ

るものは、大抵作歌の材料となり得るものである。昔の歌などでは「何の歌を作る」といふ事がまづ問題であつたやうだが、新しい歌では「何の」といふ事は殆ど問題にならぬ。卽ち材料は何でもよい、たゞ作る人の心それ自身が問題となるのである。「何の歌」は問題ではないが、「どう詠むか」「どんなに詠むか」が問題である。詠む態度と詠む技巧とが主となつてゐるのである。それで詠みたいといふ心が萌して（きざ）ゐる時には、餘り材料に選り好みをしてゐないで、まづその詠みたい心を滿足させるまで、手當り次第に作るがよい。門を出ると桐の木がある、その桐の白い幹を詠むもよい。桐の根もとには大きな新しい枯葉が落ちてゐる、その落葉

を詠むもよい。その落葉のかげには白い草花が咲いてゐる、それも十分歌になる。花のかげの地は、かすかなしめりを帶びて、朝の日影を受けてゐる、それもよければ、その地の上をはつてゐる小さな名もない蟲、その蟲を追つてゐる蟻といふやうに、心のまゝに詠み進むべきである。何を詠んでよいかわからないといつて苦むのは愚である。詠みたいといふ心が出れば――それはなか〳〵貴重な心である――その心の消えぬうちに、何でもまづ詠むべきである。室内でも大抵の材料には事を缺かぬものであるが、若し室内にゐてその材料に困つたら、前に述べたやうに、室外に出かけるがよい。そして靜に眼の前のものに心を留めて、一

首、一首と詠むがよい。またその詠みたいといふ心を誘ひ出すべき必要のある時がある。即ちその下地はあつても、まだはつきりと詠みたいとまで心のまとまらぬ時がある。そんな時にも私は、この戸外に出ることと寫生を勸める。まづ「ものを靜に視よ」と私はいひたい。門に續く杉垣の若芽、その側に立つて靜にそれを視つめてゐよ、心は次第に洗



若山牧水

はれてくるに相違ない。疲れた心にはかすかな活氣を感じはじめ、鈍い心には次第に感觸が生じ、視る眼を通して心は知らず識らず新鮮になつてくるものである。さうして捉へどころのなかつた、まとまりのなかつた心に、次第にまとまりがついてくる。心の目があいてくる。そこで「詠まう」と思ひ立つて見れば、大抵はできるものである。私が「ものを靜に視よ」といふのは、いはば一の精神集中の法である。單に、かうして心をまとめる爲ばかりでなく、一歩進んで、眼で見るまゝを一首にまとめようと努めて見よ。さうしてできたのが、必ずしもいゝ歌だとは行くまいが、ものを視る眼を養ふ爲に、見たまゝを歌に詠む練習をする爲に、初はさ

うするのがよいと思ふ。歌といふと、大層むづかしいもののやうに固くなる癖があるが、それはいけない。平かに、靜に、常にその心を澄ませて置いて、眼の前の草にでも、小鳥にでも、徐ろにものをいひかける氣持で作れば易々と作れるものだ。

「氣を變へる」「心を新しくする」といふことは、作歌の上には大切な事である。机に向つて考へ倦んだ際など、ぶらりと戸外に出て冷たい風に吹かれると、さきに頭の痛くなるほど考へこんだ時には、どうしてもできなかつた微妙な歌が、殆ど無意識に心に浮ぶ事などもある。何か用事のある時など、急いで路を歩きながら、あとからあとからと歌のできる

こともある。で、歌心のある人は、ちよつと出るにも、手帳に鉛筆をば放さないがよい。ひよつと心に浮んですぐ消えて行くやうな歌に、なか〳〵棄難い佳作がある。歌はその歌はれた材料や趣向よりも、その言葉、その調子が常におもなものであるから、ひよつと心に浮んで消えるといふ歌などをば、そのできたとき〳〵に何かに記して置かないと、初め自然に心から漏れて來た微妙な調子をば、すぐ逸してしまひがちのものである。かういふ趣向の歌であつたがと、その歌の筋をばあらましし覺えてゐても、それは多くは役に立たない。筋だけでは、最初心に浮んだ時の微妙な心持がなか〳〵出ない。その心持は、大抵言葉や調子の上に含ま

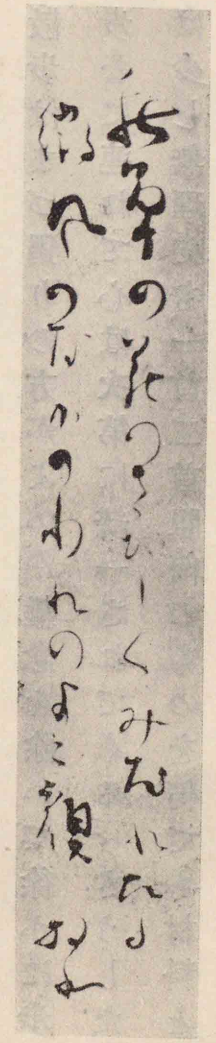
れてゐるからである。散歩の時に限らず、夜床に就いてから、思ひがけず歌のできる事などもある。そんな時には、すぐ起上つて紙筆を用意すべきである。明朝起きてからなどと考へてゐては、大抵失敗する。

散歩はまづ獨りの方がよい。雜念を除いて徐かに歩む。歩むに連れて心は次第に統一されてくる。さうした時、初は少し無理でも、一首、二首、眼前のものを何でも材料として詠んで見るがよい。初めその一二首の間は、一向おもしろくなくとも、さうして續けてゐるうちには、我知らず感興が湧いて、いつか本氣になつて作られるものである。散歩毎に必ずさうとは行くまいが、多くはさうなり易い。いつの

牧水筆蹟
秋草の花のさびしくみだれなびかたる微風のなかのわれのよこ顔　牧水

間にか、またさうした癖もつくものである。初は努めてやつて見なくてはだめかも知れないが、とにかく實地にやつて見るがよい。

旅行は散歩の大なるものである。汽車の窓、汽船の室、またはぶら〳〵と山を越えながら次第に移り行く大きな景色を眼にしてゐると、努めずとも作りたくなるのが當然であらうが、さうでなくとも、前にいつたやうに、最初二三首強ひて作つて見ると、自然にそれにさそはれて、作りたくなつて



牧水筆蹟

くるであらう。また繪葉書や手紙の端などに、何の氣なしに書きつけて出した歌に、極めて自然な佳い作を見る事もある。

散歩にせよ、旅行にせよ、餘りに心を騷がせてはいけない。餘りに思ひ昂ぶつてはいけない。自然に湧上つてくる感興をも、力めておさへるやうにして、靜に一首、二首と詠んで行くべきである。作者自身餘りに興奮してしまふと、できる歌は極めて粗雜な概念的なものになりがちなものである。どうかすると、ゐても立つてもゐられないやうな興奮を覺える事がある。私もをり〳〵さういふ場合に出會つた。或時は宿屋の二階で、ぢつと坐つて手帳に歌を書きつ

けてゐられないで、立上つて部屋中をそろ〳〵と歩きだしたけれども、力めて自分自らの興奮をかみ味はふやうな氣持で、やゝ遠くに置いて眺めるやうな氣持で、手でさはるのも恐しいやうにして、その感興を守りながら、三首、五首と作つて行つた。　或時は秩父の奥の溪間を歩きながら、これは三日間にわたつて續いた感興を守りながら詠み耽つた事もある。　こんなにして歌ができだすと、自分ながら神々しい氣に滿たされて、自分自身の事も、なか〳〵かりそめにはあつかひ得ないものである。

昔の言葉に、「歌人はゐながらにして名所を知る。」といふのがある。　これは、優れた歌人は、直覺でもつて、まだ見ぬ遠い地

の景色をも知る事ができるといふ風にも解せられるが、事實はさうでなく、概念でもつてその景色を想像し、そしてそれを歌に詠み得るといふ事に當るらしい。　甚だよくない言葉である。　世に名所と歌はれてゐるやうな大景を、概念で歌はうとしたところで、到底できるものではない。　やはり實地に見て、實際に感じたところを歌はなくてはならぬ。また初心の人は、何でも大げさに歌はなくてはならぬものと考へる傾がある。　これは歌といふとすぐ固くなるのとほゞ同じで、景色の歌を詠むとすれば、絶景、佳景でなくてはならぬやうに思ふ癖である。　これも大變に間違つてゐる。前にもいつたやうに、歌に詠むに材料は問題でなく、常に作

者の心が問題であるのだ。作者の心がよく澄んでよく張つて居れば、卽ち十分に感動が發して居ればよいのである。だから、感動もなくて强ひてこしらへた富士山の歌よりも、十分な感動を以て詠んだ名もない丘の歌の方によいのがあるのである。景色のよいのに心を動かされたから佳い歌ができたといふのならば當然だが、景色のよい所が詠んであるから佳い歌だと決していふ事はできない。心すべきである。

（短歌作法）

厨川　岩手縣岩手郡北上川の支流厨川柵のあつたところ

三木露風

名を操といひ、かつて羅風と號した。明治二十二年兵庫縣龍野町に生れた。詩人として名高く、詩集・童謠・隨筆等の著書が多い。

一　春の旅情

そゞろなり春の日に旅行けば
山櫻散る見つ岨路を歩み
われ獨り　遠くなる大野を望めば
我が胸そゞろなり　そゞろなり
陸奥の厨川　見え隱れする流水の日に輝き

白川 山形縣西置賜郡にある、飯豐山から出る

衣川 岩手縣膽澤村平泉のほとりで北上川に入る、近く衣川の柵があつた

善知鳥 小鴨に似て、嘴の元に突起がある、北海道沿岸に棲む

春尚淋しくして國原に人稀なり
われ峰を越えて
白川も衣川も後にしつ
善知鳥棲む東の濱に
曉早く春の潮のとゞろくを聽き
出でて　濱の沙を踏めば
風は千里の彼方より衣を吹く

濃藍の空と海とに
我が想は鳥の如くに翔りて

涯(カギ)りも無く行くこゝちなり
あゝ　我が憩ふべき處は何地ぞ

そゞろなり　我が胸そゞろなり
陸奥の果てなる津輕の海に
われ來りて　春空しけれど
我が憧憬は翔る　心の翼

美の殿堂　多くは廢れて
礎に櫻の散りし平泉
懷古の涙とゞめ難く　去りては雲に身をゆだね

われは行きて陸奥の津輕の海を越えき

菊池寛

明治二十二年香川縣高松市に生れた。京都帝國大學英文科卒業後、新聞記者となつたが、遂に小說家として今日の名聲を得た。小說・隨筆等の著書が多い。

一　船醫の立場（自修文）

一

晩春の伊豆半島は、所々に遲櫻が咲きのこり、山懷の段々畑には、菜の花が黃いろく夏の近づいたのを示してゐた。

日に〳〵潮が蒼味を帶びて來る相模灘が縹渺と霞んで、白雲にまぎれぬ濃

大島　伊豆七島の一

伊東　伊豆半島東海岸の溫泉場

い煙を吐く大島が、水天の際に糢糊として横たはつて居るのさへ長閑に見えた。

が、さうした風光の中を伊東へ辿る二人の若い武士は、二人ともが、何か險しい憔悴した顏をしてゐた。

二人は、頭を大束（オホタバサ）に結つてゐた。一人は五尺一二寸の小男だつた。顏中に薄い痘痕（アバタ）があつたが、細い眼は光つて、眼尻が上り、鼻筋が高く通つて精悍な氣象を示してゐたが、そのげつそりとこけた頰にぢり〳〵生えてゐる鬚が、この男の風采を淋しいものにしてゐた。一人は、色の黑い、眉の太い、立派な體格の男だつたが、憔悴してゐることは前者に異ならない。

小男は木綿藍縞の浴衣に、小倉の帶を締め、無地木綿のぶつさき羽織を着、鼠小紋の半股引をしてゐた。體格の立派な方は雨合羽を羽織つてゐるので、服裝は見えなかつた。

吉田寅二郎　松陰と號した、萩藩の士、萬延元年刑死す、年三十

金子重輔　萩藩士、安政二年獄に死す

三月の六日　安政元年

程ヶ谷　東海道の一驛、横濱市の近くにある

神奈川　今の横濱市の東部

小男の方は吉田寅二郎で、他の一人は同志の金子重輔であつた。二人は三月六日から十三日まで程ヶ谷に宿をとり、神奈川に碇泊してゐるアメリカ船に近づかうとして晝夜肝膽を碎いたが、望を達する機がなかつた。そこで程ヶ谷の宿を立つて、その後を慕つて下田へと急ぐのであつた。藤澤、小田原、熱海と宿つて、今日、三月十七日熱海をたつたのである。

二人が伊東へ一里ばかりの海岸へ來たとき、道の兩側には蜜柑畠があり、その中には白々と花の咲いたのもあつて、香ばしい匂が鼻を衝いた。二人が蜜柑畠の畔に胸をおろして、割籠（ワリゴ）を開かうとした時だつた。蜜柑畠の中に遊んでゐたらしい子供が聲を揚げた。

「やあ千石船が通るぞ。千石船よりまだ大きいぞ。二艘だ、二艘だ。」

寅二郎は何の氣なしに海上を見た。見ると海岸から一里も隔つてゐる海上を、異樣な怪物が黑色の煙を揚げつゝ疾驅してゐるのだつた。それは夢

メリケン　アメリカ合衆國

にも忘れない黑船である。今日はその三重の帆を海鳥の翼の如く擴げ、しかもそれで足りないで、兩舷の火輪を廻して、やゝ波立つてゐる大洋を巨鯨の如く走つてゐるのだつた。

「見られい、あの勢を。」

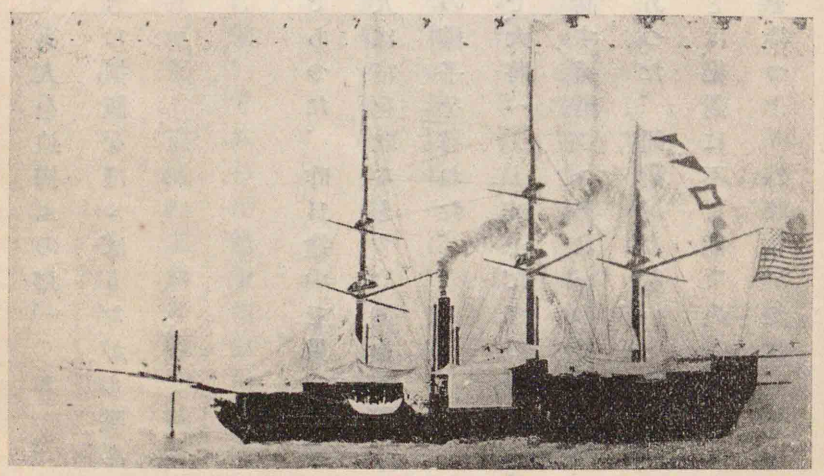
寅二郎は敵愾の心も忘れて嘆賞した。

「毛唐め、やりをる。やりをる。あのやうに皇國の海を人もなげに走りをる。」

慷慨家の金子は、翼なき身を口惜しがるやうに、足摺りをしながら叫んだ。

「なに、いまにメリケンへ渡つて、あの術

浦賀來航米艦の圖



を奪つてやるのだ。夷人の利器によつて、夷人を追拂ふのだ。」

寅二郎は、熱海の湯の宿で作つてくれた大きな握飯をほゝばりながら叫んだ。

二

二人が下田へ着いたのは、翌十八日の午後であつた。昨日途中で見た二艘の火輪船は、港口近くに碇泊して居た。二人は宿を取ると、すぐ港を警衛してゐる役人たちに會つて、それとなく黒船の樣子を尋ねた。

役人たちの話によると、この二艘は先發隊で、大將ペリーはまだ來てゐない。その上支那語ばかりでなく、オランダ語を話す通辭さへゐないので、薪水積込の應答にさへ困つてゐるといふことであつた。通辭がゐないとすれば、潛に乘りつけて事情を陳べて便乘することは、絶對に不可能である。二人はペリーが乘つてゐる旗艦が入港するのを待つより外はなかつた。

ペリー　この時のアメリカ艦隊の提督

柿崎　下田港の東に突出した岬角

二十一日の午後、ペリーの座乘してゐる旗艦ポーワタンが、他の三隻を率ゐて入港した。

二十二日から二十六日まで、寅二郎と重輔とは、日に夜を次いで黒船に乘込むことを謀つた。二十四日の朝、二人は下田の郊外を歩いてゐる夷人を追ひかけて、かねて認めて置いた投夷書を渡した。そしてこの二三日出來た疥癬によいといふので、改めて取つた蓮臺寺村の湯の宿へは、下田へ行つて宿るといひながら、二人は毎夜海岸へ出て黒船の樣子を窺つた。疲れると、そのまゝ海岸に露宿した夜もあつた。

二十五日の夜に、下田の村を流れてゐる川に繫いであつた船を盜み、川口の番船の眼を忍んで海へ出た。が、その夜は波が荒く、重輔の未熟な腕では、舟が同じ所をぐる〳〵廻轉するだけで、何時までたつても沖へは出られなかつた。綿のやうに疲れた二人は、柿崎の濱に引返すより外はなかつた。二

人は濱邊の辨天堂で夜が明けるのも知らずに熟睡した。

二十七日の夕方、柿崎の濱邊へ出て見ると、意外にもミスシッピー艦が、海岸から二町とない沖合に碇泊してゐるのを見た。それから半町も隔てずに、旗艦のポーワタンが碇をおしてゐる。

二三日前から港内を測量した結果、碇泊の位置を變へたらしかつた。寅二郎と重輔とはこをどりして喜んだ。

吉田松陰

その上、辨天堂のすぐ眞下の渚に二隻の漁船がつなぎすててある。ちやうど使へといはぬばかりに。

二人はすぐ蓮臺寺村へ歸つて夕食を認めた。下田の宿へ移るといつて航海の準備をした。寅二郎は着換の衣類二枚と、小抄本孝經、和蘭文典前後譯

孝經　孔子が門人曾子の爲に孝道を説いた本

和蘭文典前後譯鍵　オランダ語學の辭書

唐詩選　唐代詩人の作を明李攀龍の撰んだ書

五つ時　午後八時

八つ　午前二時

鍵二冊、唐詩選掌故二冊、抄錄數冊とを小さい振分けの包にした。それが千里の海を渡つて、アメリカへ行く彼の荷物だつた。

夜の五つ時、辨天堂の下の海岸へ出て見ると、降るやうな星月夜の下に波は思の外風いでゐた。六隻の黑船は銘々に青い碇泊燈を揭げながら、小島のやうに、その黑い姿を並べてゐた。二人の心は躍つた。が、晝間見た小舟を探して見ると、それは引潮のために砂濱高く殘されてゐるのだつた。二人は一所懸命になつて押して見た。がびくとも動かなかつた。

潮が再び滿ちて來るのを待つより外はなかつた。二人は辨天堂の中へ入つて寢てしまつた。目がさめたのは、八つを廻つた頃だつたらう。星明りの中に、潮が堂の眞下まで滿ちてゐるのがわかつた。

二人は喜び勇んで船に乘つた。けれども櫓を取つて漕ぎださうとすると、肝心の櫓臍（ロベソ）が無いことが分つた。駭いてもう一つの舟に乘替へて見た。

その舟も同じだつた。あわてた。が、咄嗟な場合、二人は小倉の帶を解いて櫓を船に縛りつけた。

漕ぎだして見ると、岸に立つた時とは違つて波が荒かつた。ともすれば舟は波に煽られて、轉覆りさうになつた。その上寅二郎は、今まで舟を漕いだことがなく、たゞ力委せに櫓を動かすのだから、二人の調子が合はず、一番間近のミスシッピーへ向けた舳はくる〳〵廻つて、前に下田の町の灯が現れたり、柿崎の濱の森が現れたりした。舟は前へは進まないで同じ所を廻つた。

二人の腕が脱けるやうになつた時、やうやくミスシッピー艦の舷側へ着いた。二人は蘇生した思がした。

「メリケン人！　メリケン人！」

重輔は小舟の舷に足をかけながら大聲に叫んだ。

ギヤマン　硝子のこと

バッテイラ　ボート、イスパニヤ語

艦上に怪しい叫聲が起り、人の氣配がしたかと思ふと、ギヤマンの燈籠が舷側から吊卸された。見上げると、船上から數人の夷人が見下してゐる。寅二郎は矢立を取出し、燈籠の火で懐紙に「吾欲往米利堅君請之大將」と手早く認めて、その紙片を持ちながら舷梯をかけ上つた。が、不幸にも、その船には通辭がゐなかつた。老いた夷人は寅二郎からその紙片を受取ると、別の紙に横行の字をかいて、二つの紙片を寅二郎に返しながら、ボーワタン艦を指して、手眞似であの船へ行けといつた。二人はその意味がわかつたけれども、乘つて來た小舟で、更に一町の沖合へ進むことは至難のことであつた。寅二郎は吊つてあるバッテイラを指して、手眞似であれで連れて行けと賴んだが聽かれなかつた。

疲れ切つた身體で、二人はボーワタンまで漕いでいつた。沖へ出れば出るほど波が荒くなつた。舟は容易に彼等の思ふ通りにならなかつた。艦の

内側につけようと思つたのが、外洋へ向つた外側についてしまつた。しかも舷側と舷梯との間に挾まれ、烈しい波に、凄じい音を立てながら舷側へ幾度も叩きつけられた。

その音が聞えたのだらう。手に長い棒を持つた夷人が、怒り罵りながら舷梯をかけ降りて來て、二人の乘つた舟を突出さうとした。突出されてはたまらないと思つたので、寅二郎は素早く舷梯へ飛移つた。重輔は梯子に移つた寅二郎に纜を渡さうとしたが、夷人は容赦なく舟を突出すので、重輔もあわてて舷梯へ飛移つた。そして小舟の纜を放してしまつた。

舟には二人の大小と、荷物とを殘してあつた。が、旗艦に乘つた以上、ともかくもどうにかなると思つたので、小舟の流れ去るのを顧みなかつた。むろん顧みる餘裕もなかつたが。二人を艦上へ拉した夷人は、二人が船を見物に來たのだと思つたのだらう、二人に羅針盤を見せたりした。二人は首を

ふつて、筆と紙とを求めた。矢立も懐紙も小舟へ殘して來たのである。

間もなく日本語の通辭ウヰリアムスが出て來、そして二人は船室に導かれた。ギャマンの洋燈が、室内を眞晝のやうに煌々と照らしてゐた。寅二郎は生れて初めての鵞筆を持つて、「メリケンへ行きたい。」といふ志望を漢文で書いた。ウヰリアムスは、早口の日本語で、「それは何國の字ぞ。」ときいた。寅二郎が「日本字なり。」と答へると、ウヰリアムスは笑つて、「それは唐土の字ではないか。」といつた。ウヰリアムスの明晰な日本語と日本に就いての智識が寅二郎たちを悦ばした。二人は初めて慈母の手を探り得たやうな心持になつて、その心の中の火のやうな望を述べはじめた。

三

間もなく、ポーワタン艦の提督の船室で、二人の日本青年の希望を容れるかどうかに就いて、會議が開かれた。提督と參謀と、ポーワタン副艦長と艦長

のゲビスと、船醫のワトソンと、通辭がそれに加はつた。十一時を過ぎてゐたが、事件が異常であるために、誰も彼も興奮してゐた。殊に副艦長のゲビスは、二人の日本青年の熱誠に動かされて誰よりも興奮した。

協議はかなり長かつた。そして終に會議の傾向が拒絶に傾いたので、ゲビスは躍起になつた。平素は寡言な提督ペリーが重々しい口を開いて、

「しかしゲビス君。私もあの青年たちの希望を遂げさせたいといふ感情に於ては、君と異ならない。が、しかし私は神奈川に於て、合衆國の國家と日本の國家との條約を結んだ。その私は、私情を以て日本の法律に背かうとする日本人を扶けることはできない。が、私は望む、智識に渇(カツ)えてゐる日本の青年が、自由に我が國へ到來する日が、間もなく來ることを。そして現在この二人の青年に對する庇護を拒むことは、却つてさういふ未來の近づくのを早める所以でないかと思ふ。」

といふのを聽いて、彼はちよつと頭を傾けたが、またすぐ叫んだ。

「閣下、貴(アナタ)下の言葉は私を首肯させる。が、しかし、公明正大な好奇心によつて、わが國へ渡航せんとするこの愛すべき青年の身の上を考へてやつて下さい。われ〳〵が彼等を拒絶することは、彼等を斷頭臺へまで追上げることを意味する。われ〳〵が彼等を陸へ追ひやれば、彼等はすぐに政府の役人によつて捕縛されるでせう。そして、日本の峻嚴な法律は、彼等の首を身體から斬放つでせう。われ〳〵合衆國人の渡航によつて好奇心を起し、われ〳〵の故國を慕ふものを、われ〳〵の手によつて斷頭臺の上へ追上げることは、アメリカ合衆國の恥ではないでせうか。われ〳〵の大統領がわれ〳〵を日本へ送つた所以は、形式的な條約を結ぶためではない。孤島の中に空しく眠つてゐる可憐な國民を、精神的に呼覺ますことではないか。然るに今、われ〳〵の喚起に最初に答へたこの先覺者、

國民全體の觸覺ともいふべき聰明なる青年の哀願に、聾ひたる耳を向けるといふことは、われ〳〵が帶びてゐる眞の使命に對する反逆ではありますまいか。二人の青年を、日本政府の役人の眼から隱して、日本政府の感情を傷けることなしに本國に送ることは、もしそれをやらうと思ひさへすれば、甚だ容易なことである。私は提督が、わが國建國以來の精神たる正義と人道との名に於て、この青年の志望に耳を假されんことを切望するものであります。」

ゲビスの熱辯は、すべての人を動かした。曾て自說を曲げたことのない艦長でさへも、暫くの間は默つてゐた。提督の顏にも著しい感動の色が浮んだ。彼の心は、二人の日本青年の利益のために動いたことは確であつた。彼は青みがかつてゐる顏を上げて、一座を見廻はした。

「外に意見はありませんか。ウヰリアムス君！　ワトソン君！」

その時ワトソンは、ふとさつき日本青年の一人が、ランプの光で字を認めてゐる時、その手指に無數に發生してゐた傳染性の腫物のことを思ひ出した。

「私は船醫として、たゞ一言申して置きたい。彼の青年の一人は、不幸にもスカビス、イムペチゴに冒されてゐる。それは我が國には稀有な皮膚病である。殊に艦內の衞生にとつては、一つの脅威です。私は衞生に對する責任者として、一言だけ申して置く。無論、私はこの青年たちに對して、限りない同情を抱いてゐるけれども。」

ゲビスの正義人道を基本とした雄辯も、この實際問題の前にはたぢ〳〵となつた。

提督の顏色が再び動いた。彼は青年の哀願を拒絕する心の寂しさをまぎらすいゝ口實を得た。かなり長い熟考の後に提督はかういつた。

「ゲビス君。私はこの青年に對する同情に於て、決して君には負けはしな

い。が、併し青年たちの志望よりも、艦内の衞生の重んずべきことに就いては、諸君が一致してゐてくれると思ふ。そこでウヰリアムス君、あの青年たちを宥めて、陸上へ返して下さい。ゲビス君、君はあの青年を送りかへすために、短艇の用意を命じてくれたまへ。」

かくて命令は即時に實行された。船醫のワトソンは、二人の青年が舷梯から降されるのを見た。二人は眼に涙を湛へながら、合衆國人の仁義心に訴へても、それが容れられなかつたと知ると、穩かなわづかの抵抗を試みた後、その不幸な運命に服從した。彼等のつゝましい惡びれない態度を見たワトソンは、その夜船室の寢臺で終夜眠られなかつた。

四

不幸な日本青年に就いての事件が起つてから三日目の朝、ワトソンは他の一人の士官と一しよに上陸した。

よく晴れた一日だつた。二人は海岸を散歩してから、市街の裏手の方へ廻つた。子供らがうるさくついて來るので、手眞似で追拂つたが、しつこく何處までもついて來た。

彼等は、ふと營所らしい建物の前に來た。兵卒らしい人間が、槍のやうな物を持つて、その門を守つてゐた。

見ると、その營所を圍む木柵に多くの男女が集つてゐた。ワトソンが行くと、彼等はこの異邦人を怖れるやうに避けた。ワトソンが木柵に身を寄せながら營所の中をのぞきこむと、木柵から一間と離れないところに、獸を入れるやうな檻があつた。檻の中に何かうごめいてゐるやうなものがあるので、ぢつと見詰めると、その白い格子の間から、青白い二つの人間の頭が現れて、彼を見てにつと微笑した。それは紛れもなく、先夜自分たちの艦を訪れた、あの不幸なる日本の青年たちであつた。その檻は、二人の人間を容れ

カトウ　ローマの哲學者

るのには餘に狹かつた。二人は膝をつき合はせながら、窮屈さうに坐つてゐた。

二人の可憐な有樣が、ワトソンの心を暗くした。彼は思はず英語で、

「おゝ可憐な人たちよ。君たちはどうして捕へられたか。」

と大聲で叫んだが、無論通じる筈はなかつた。

が、ワトソンの叫ぶのを見ると、二人の青年はワトソンが彼等を認めたのが分つたと見えて、かなり喜んだ。そして一人の――かのスカビスを患つてゐる青年は、自分の掌を直角に頸部に當てて、間もなく自分の首が切られることを示しながら、しかも哄然と笑つて見せた。ローマ人カトウを凌ぐやうな克己的態度が、ワトソンを壓服した。ワトソンは、木柵を摑んでゐる自分の手が、ある畏怖のために、かすかにふるへるのを感じた。彼は二人の日本青年の生命を救ふためには、どんな事でもしなければならないやうな氣

になつてゐた。

ふと見ると、笑つた青年は、字をかく眞似をしながら、筆紙をくれといふ意味を示した。ワトソンは懷(フトコロ)を探つて、一本の鉛筆をさぐりあてた。が、何の紙片もなかつた。すると一人の日本青年が、どこからか薄い木片を拾つて來てくれた。一間も隔たつてゐる檻へ、如何にして差入れようかと考へてゐると、老人の牢番がそれを渡してくれた。

彼の青年は鉛筆をとると、それを不思議さうに一瞥した後、何の躊躇もなく、木板の上に流暢に書きはじめた。十五分の後に、餘地もないほどに字を書きつめた木片が、ワトソンの手に返された。

ワトソンは青年たちに目禮して、心の中でこの不幸な青年たちの祝福を祈りながら、船へ歸つて來た。そしてその木片を支那語の通辭である廣東人羅森に示した。

羅森は次のやうに譯した。

「英雄一度その志す處に失敗せば、その行爲は奸賊・强盜を以て目せらる、吾等、衆人環視の中に捕へられ縛められて、今や獄裡に幽閉せらる。村老は吾等を遇するに侮蔑を以てし、虐待至らざるなし。六十餘州を踏破するに滿足せずして、我等は五大洲を周遊せんとせり。これ我等が宿昔の願なりき。今や、我等が計策は一朝にして敗れ、隘屋の中に禁錮せられて、飲食、休息、睡眠にも艱めり。我等は到底この囹圄より脱する能はず。あゝ泣かんか、愚人に似たり。笑はんか、惡漢の如し。我等はたゞ默して

菊池寛

已まんのみ。」

提督ペリーを初め、先夜の會議に列した人々は、揃つてこの譯文を讀んだ。そしてめい〳〵に深い感激を受けずにはゐられなかつた。

「何といふ英雄的な、しかも哲學的な安心立命であらう。」

提督は深い溜息と共にさう呟いた。

ワトソンは心の苦痛に堪へないで、自分の船室に歸つて來た。が、そこにもぢつとしてゐることが出來なかつた。彼は自分の船醫として主張した一言が、果して正當であつたかどうかを考へずにはゐられなかつた。彼の心には、スカビスが、この高貴にして可憐な青年の志望を犧牲にしなければならないほど、恐ろしい傳染病であるか、どうかが疑はれて來た。（菊池寛集）

幸田露伴

名は成行といひ、慶應三年江戸に生れた。新聞記者、小説家、京都帝國大學講師等を經て今日に至つた。文學博士。小説・論文・史傳・隨筆等の著が多い。

一　牛

世をはなやかに　面白う
樂しげに行く山車（ダシ）の牛
ちやんちき〳〵の鳴物に
囃さるゝ身も安逸（ラク）は無う
夏の一日　荷は强く
夕陽に辿る肢重し

翠山圍む村古りて
白雲の底　鷄うたふ
晝寂々としづかなる
田舍の瘠田鋤く牛の
歩みも緩く日を暮す
心のどけくゆつたりと
尾をうごかすや　春の風
山田鋤く牛、　山車の牛
虚榮の街のかしましき
笛・鐘の音に　我が耳を
にごして心疲らせて

人の玩弄（アソビ）とならんより
自然にちかき山里の
松の根方の晝やすみ
梢のかぜに　罪も無き
夢を吹かせて　田夫（タックリ）と
共にまどろむ小半時
翼つかれし蝶々に
角は貸しても　よしやよし
たゞ我が性を遂げんこそ
いつはりあらぬ望なれ

（心のあと）

二　雜草

雜草といふものこそ面白きものなれ。百坪の庭には百坪の雜草生ひ、千坪の庭には千坪の雜草生ふるなり。世若し嘉禾・良穀のみにて、雜草といふものなからばば、富貴の者は長へに誇りて、貧賤の者は食を得ざるに至らんを、雜草といふ者の生ふるが爲に、庭園の驕も限りあるなり。然らずば百萬坪・二百萬坪の庭園を造りて、益もなく己が驕奢の爲に國土を塞がん者も出づべし。　雜草は人間の驕に課する租稅にやあらんと面白し。

又雜草といふものこそ面白き者なれ。これを踏みにじり、これを刈り薙ぎ、これを拔棄て、これを燒拂ひても終に盡き

滅びたる例を聞かず。必ず年々の春夏を我が世顔に生ひ茂りて、あはよくば人の思を寄する園の花をも逐ひ退け、民の命と頼む稻・麥をも虐げて、己れのみ心のまゝに蔓(ハビコ)り榮えんとす。されば園守・田夫少しくこれを除き去ることを怠れば、忽ち其の咎を得て、花は色なく、穀は登らざるに至る。彼の「道高きこと一尺、魔の高きこと一丈」といへる諺も思ひ合さるゝばかりなり。世若し雜草といふものなからば、能く勤むる者も、一度種子を播き、苗を

幸田露伴

道高き云々 支那の古諺

植ゑたる以上は、皆同じ報を得べきに、これありて勤むる者は佳報を得、惰る者は惡果を得。雜草は人間の怠惰を警むる造化の鞭にやあらんと恐ろし。

（潮待ち草）

大町桂月

名は芳衞といひ、明治二年高知市に生れた。東京帝國大學卒業の後、中學校に教鞭をとつたが、後に雜誌記者として文名を走せた。著書は頗る多い。大正十四年歿す、年五十七。

一　三人一兩損

江戸の靈岸島長崎町に、疊屋三郎兵衞といふものありき。正直者のぶつきら坊にて、お世辭氣は微塵もなし。贅澤す

靈岸島 今の東京市深川區

小傳馬町 今の東京市日本橋區

三味線堀 今の東京市淺草區小島町にあつた

るでなく、道樂するでもなけれど、師走に押しつまつて、どうしても無くてはならぬ金三兩、和泉橋邊の出入場にゆき、賴むより早く、いさぎよく貸してくれたるも正直の餘德、これで年が越されると安心して歸り來り、懷をさぐるに入れた筈の金なし。袂をふつて見ても無し。さては、路におとしたるに相違なし。折角借りた金をおとすといふは、よくよく金に運の拙き者なり。この上は唯一所懸命に働くの外なしと、江戸兒の本性、思ひ切り善く、愚痴をこぼさず、悔んでかへらぬ事を悔みもせず、平生よりも一層勇氣を出して、せつせとかせぎたり。

小傳馬町に建具屋長十郎といふ者ありき。三味線堀へ用

たしに行き、柳原の土手下にて小便しながら、ふと紙に包みたるものの落ちたるを見る。とりあげて、其の中をしらぶるに三兩あり。落し主は、さぞや困り居るならん。送りとどけずには居られずと決心しぬ。それも金を白紙につゝみたるならば、落し主をさがす手掛りもなけれど、幸にも三郎兵衛は、他より貰ひたる手紙につゝみたり。手紙の宛名は疊屋三郎兵衛、落し主の職業と名とは知れたるなり。今の聖代の有難さ、拾ひものすれば、警察に屆けざるべからず。一年にして落し主出でずんば、拾ひたる人の所得に歸す。落し主出づるも、凡そ五分の禮をすることに定まり居れど、徳川時代には、そのやうな簡便法は無かりしにや。殊勝な

るかな、長十郎、三兩の金の落し主をさがさんとて、草鞋を穿き、腰に辨當つけ、さらでだに忙しき節季師走、我が身に職業あれど、人の難を默視して居られず、疊屋三郎兵衞といふ人は居らぬか、もしも落し物はせぬかと、江戸の八百八街を片つぱしより尋ね歩く。

一日又一日、四五日は空しく過ぎぬ。たま〳〵疊屋三郎兵衞といふ者あるかと思へば、「落しものはせぬ。」といふに、さては落し主にあらざるかと、尋ねに尋ね、さがしに探して、終に靈岸島長崎町の疊屋三郎兵衞を探しあてたり。「落し物はせぬか。」と問へば、主人は暫し考ふる樣子なりしが、女房・娘が差出でて、「先日金を落した事を忘れられしか。其の金高は

三兩、疊屋三郎兵衞といふ宛名のある手紙に包んであつた筈。」と。「證據は十分なり、受取られよ。」とて金を出すに、三郎兵衞は承知せず、「金を落すといふは金に運のなきものなり。拾はれたるそなたは、金の果報者、天が授けたるなり。その金はそなたの金なり、我が金にあらず。殊に數日間も探し廻られたりと聞きては、甚だ以てお氣の毒なり。そなたが持ちて歸られよ。」といふ。「いや〳〵拾ひたる金をとるやうならば、このやうに辛苦して探すことはせざるべし。我が心づくしを察して、其の金は納められよ。」といなむ。「いや受取らぬ、いや持ちかへられよ。」と果てしなければ、長十郎は金を投出して立出でんとす。三郎兵衞飛出して長十郎の襟

大岡越前守名は忠相、八代將軍徳川吉宗の時、江戸南町奉行であつた

をつかみ「この無禮者」と鐵拳を揮ふ。「この馬鹿野郎」と打ちかへす。氣早き江戸兒肌の職人同士、正直だけに激怒し易く、始の好意は何處へやら、仇にでもめぐり逢ひたらんが如き大立廻「喧嘩だ〳〵」と行人が立ちどまる、家主が出て來る、名主までも引張り出されて、やつと二人を引きわけたれど、始末のつかぬは金三兩なり。止むを得ず明判官の聞え高き大岡越前守に訴へ出でたり。

越前守は二人の言ふ所を聞きて、今の世の中にもかゝる正直者があるかと感嘆に堪へず。追つて沙汰するとて、其の日はそのまゝ歸らしめ、數日經て再び呼出す。白洲には竊盜・强盜・詐欺などの罪人多く居並べり。越前守判決を下し

て曰く「二人の金を讓りあふ事は當代の美談なり。三兩の金は官に納め置き、改めて官より金四兩を下し遣はさる、之を二人にて等分せよ」と。二人問うて曰く「もとの金は三兩なり。之を等分すれば一兩半となるべきに、二兩づつ分てとは如何なる事にや」と。越前守答へて曰く「三郎兵衞は三兩落して二兩とる。一兩の損なり。長十郎は三兩拾ひて二兩とる。一兩の損なり。我も餘りの殊勝さに一兩損をして兩人につかはすものなり」と。兩人納得して退く。三人一兩損の裁判とて世に名高くなりぬ。三郎兵衞と長十郎とは意氣相投じて、極めて親しく交るやうになれりとぞ。

（桂月百話）

高知
高知縣高知市

二　冷汗記

土佐の高知の北門筋は、余の生まれたる處なり。北門筋は其の名の如く高知城の北門の通りなり。屋敷の前には小溝ありて、石垣高く、後ろには竹藪ありて大川緩く流る。その川を利用して家鴨を飼へり、小舟を置けり。余は七八歳まで其處に生ひたちけるが、今思へば恍として夢の如し。不肖なる余は、時々父を困らせたり。父に伴なはれて出でし途、大川ありて堰あり。石堤その川を横斷す。中央に水路あり。板を底として、かなりの勾配を水急に流る。父は舟を堤下に繫ぎ、「待つて居れ」と言棄てて、流口の上部を渡る。

されど余は父の命を奉ぜざりき。待たさるゝを厭ひて、父の後を慕ひ渡らんとして滑りたり。流されて渦卷く深淵に陷りたり。「子供が流されたゝ」と行人の叫ぶに、父始めてそれと知り、直に水中に躍り入りて余を救へり。危い哉、當時われ未だ水泳の術を知らず。行人の注意なくんば、そのまゝ溺死したるかも知れざりしなり。これ全く余が頑愚にして、父の命を奉ぜざりしに由る。

三四歳の頃の事なり。われ一人芝居を見に行くとて家を出でたり。母は握飯をくれたり。然るに芝居へは行かず、何處をどうぶらつきけむ、眞如寺橋の上に坐りて、むしやむしや握飯を食ひ居たるこそ愚なれ。我が父潮江村よりの

歸途、これを見て伴れ歸る。父は如何ばかり冷汗を流したりけむ。この事余の記憶に存せず、年長じて後、母より聞きて冷汗を流しぬ。

大町桂月

頭腦の明かなる人は、幼時より聞分けよくして素直なるが、頑鈍なる人は、聞分け惡くして强情なり。頑鈍なる余は幼時より强情なりき。家の人々、我が家の舟に乘りて對岸に渡らんとす。われ隨行を乞ふ。許されず。舟、岸を離るゝ、われ冬の日の寒さをも顧りみず、衣服着たるまゝにて、水中に

躍り入りて舟を追ふ。舟中の人々、これには閉口して舟を返したり。余が六七歳のことなるべし。これも余の記憶には存せず。年長じて後、親戚の一老女より聞きて冷汗を流しぬ。その他、當時或一夜雪隱に落ちしことあり。斧にて薪を割らむとして、足の親指を切りしことあり。木の上より落ちて氣絶せし事あり。よく〳〵魯鈍にして意氣地なき男なりき。

高知の北郊なる秦泉寺村に移り住みし頃なり。秦泉寺小學校へは轉學しけるが、風呂敷包さげて學校に通ふよりも、鎌を腰にして山野を荒し廻ることの嬉しさよ。人か、猿か、身體敏捷、木に登ることが得意なりき。或時、楊梅（ヤマモモ）の木を一

山の麓に見出だして、つる〳〵と登り、紅熟せる實を採つては喰ひ、採つては喰ひ、獨り自ら喜び居りしに、持主の老人夫婦いつしか樹下にあらはれ、「こりや、大きな烏が居る。」と言はれて、びつくり仰天、飛下りて駈出す。老翁追つかけ來りしが、敏捷なる余にはとても追ひつくべくもあらざりき。

橋を渡るには、必ず欄干をつたひたりき。橋の欄干の上を走るくらゐでは氣がすまず、幅二寸有るか無しの板塀の上を走りてこれを樂みたりき。或時、珍しく森氏へ嫁せる伯母と國澤氏へ嫁せる伯母とが打伴れて來訪し、父と座敷に品座す。この三人が父の同胞の總べてなり。われ嬉しさに堪へず。一寸頭を下ぐるより早く、例によつて板塀の上

を走りしに、國澤の伯母顧みて、「芳衞がゐくつちよる。」といふ。「ゐくつちよる。」は「嬉しがつてゐる。」の方言なり。心の中を言ひあてられて氣恥づかしくなりしが、父に「あちへ行け。」といはれて、始めて去つて例の裏の山に登りぬ。父の同胞三人が閑談せる座敷の天井の眞中に、燕の巣ありて、恰も燕が出たり入つたりして居たりしを記憶す。

余は魯鈍頑迷、かく殊に人並はづれて惡戯好きなりければ、父に叱られざる日とては殆どこれなく、父の嚴は秋霜の如く、母の慈は春風の如く覺えたりき。又思へば、土藏の壁に偉大なる蜂の巣あり。父戒めて曰く、「決して壞してはならぬぞ。」と。然るに余は物干竿を以てこれを打落したり。蜂

にはさゝれる、父には撲たれる。所謂泣面に蜂の滑稽を演じたることもありき。

悪戯好きなりしかど、もとゝ〳〵お人好しなり。されば直接に人に對して悪戯したることはなかりき。口吃(どもり)して對話する能はざりしかども、人に接することもこれを好み居たりき。

(桂月文選)

與謝野晶子

明治十一年十二月大阪府堺市に生れた。與謝野寛氏夫人。明治歌壇に新運動を起して歌人として名聲を高くした。詩歌・評論・感想・隨筆・小説等に多くの著作がある。

一　蜂

夕立の風
軒の簾を動かし
部屋の内　暗くなりて
片時涼しければ
我は　物をかきさし
空を見上げて　雨を聽きぬ

書きさせる紙の上に
何時しか來りし蜂一つ
よき姿の蜂よ
腰の細き　糸に似て
身に塗れる金は
何の花粉よりか成れる

好し　我が文字の上を
蜂の匍ふに任せむ
わが匂ひなき歌は

すがれし花に等し
せめて彌生の名殘を求めて
蜂の匍ふに任せむ

吉江喬松

明治十三年長野縣東筑摩郡鹽尻村に生れた。かつて孤雁と號した。早稲田大學英文科を卒業後、パリ大學に學んだ。早稲田大學教授である。飜譯・評論・詩文の著作が多い。

一　霧

北國街道の上には夏草がのびてゐた。
柏原から野尻湖まで一里ばかりの間、朝霧が深くかゝつて

柏原　長野縣上水内郡の小驛

ゐて、路上の野には露が重かつた。汽車をおりて初めて大地を踏んで行く草鞋の心持、久し振で旅を味はふ心には、總べてが鮮に感じられた。

柏原には一茶の俳諧寺の在ることは聞いてゐたが、霧が深くて見に行く氣にもなれなかつた。何處の國道沿ひにでも見る廢驛の姿は、此の村にも見られた。桑の葉の蒸されたやうな香と、上簇期に近い夏蠶の臭とが、家々の戸口から洩れて路上に漂つてゐた。

村を出拔けると、霧の間から白樺の林の樹幹だけが、ぼんやりと兩側に見えて來た。しと〳〵と草を踏んで行く自分の草鞋の足音だけが耳に入る。ふと立停ると、急に周圍が

しんとして來る。霧が一層濃く覆ひかぶさつて來るやうな氣がする。其の中で、霧が林の木の枝に引つかゝり、白樺の簇葉(ムラバ)にからまつて、やがて重い露となつて、ぽた〳〵と草の上へ落ちるのが聞える。又ばた〳〵と歩き出すと、向ふの方から農夫らしい男が二人ばかり、ぼんやり霧中へ浮ぶやうに姿を見せるかと思ふと、擦(ス)れ違つて直ぐまた後の方へ消えてしまふ。

霧が帽子の緣に突裂かれて、さあつ〳〵と音を立てるやうに思はれる。地上足の向いて行く三尺ぐらゐ前が目に入るだけになつた。今にも此の濃い霧が一時に崩れて雨となりはしまいか。でなければ、此の霧が一時に凝結して動

きのとれないものになつてしまひはしないか。そんな事を思ひながら歩いて行くと、今まで動かずに一層深く〳〵集つてゐた霧が、次第に少しづつ流れ出した。濃淡の差別を見せて周圍に流れ出した。上の方へ、其の頂へ逃げるやうに昇つて行くもの、下の方へ、草叢の中へ低く這ふやうに迷ひ込むもの、その間を透かして、豆畑や、粟の畑や、草原や、白樺の幹などがぼんやり見えて來る。農家が一二軒處々に立つてゐるのが目に入る。

太陽は晝間見る月のやうにたゞ薄白く、霧の薄れた中から形だけ見せるけれども、光をば散らさない。その形も見えたかと思ふと、直ぐ霧の中に隱れてしまふ。と、鶯の聲が白

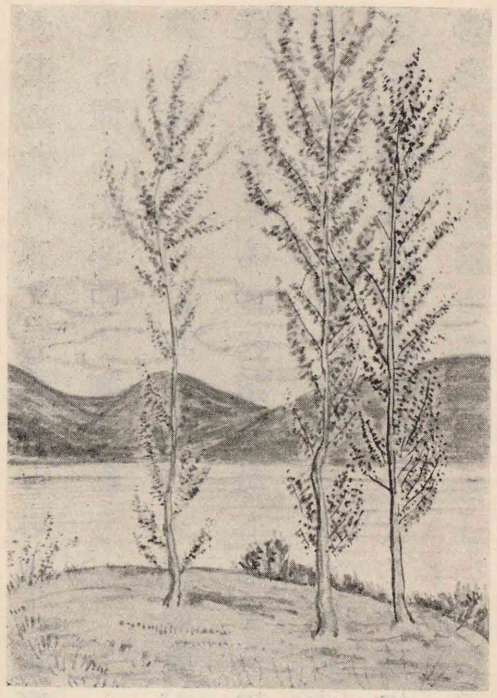
樺の林の中から響いて來た。霧の中に籠められた其の聲は、秘めた歡樂をうたふやうに、低い平原國を追はれたものが其の中へ來て思ふまゝの自由を享樂してゐるやうに、何人も憚らぬ心ゆく調である。

霧の薄れて行く其の中から、蟬の聲がまたも聞え出した。迷つてゐるものに道を敎へるやうに、日中が近寄つて來ることを告げるやうに、身をゆすぶり、木をゆすぶり、林をゆすぶつて、立籠める霧を追ひやるやうに、望に滿ちたしらべである。

蘆のこんもり群立つてゐる姿が處々に見えだした。水溜が次第に近寄つて來たことを思はせる。その中からけた

たましく行々子(ヨシキリ)が騒ぎ立てる、何ものかの警告を與へるやうに、今まで默つてゐたものが不意に目を醒したやうに。

今までは、默々として動き廻つてゐた霧が、天地を我が物顔に領してゐたのだが、今や、一つ〳〵聲を立てて飛廻るものの生命が目を醒して來た。



野尻湖

さきの方に山の裾が見え出して、その裾をめぐつて曇つた鏡の面のやうに、水面がぼんやり霧の中から浮んで見える。

山々の間に入込んで、彼處にも此處にも光の無い水が見える。けれど水の上は餘所よりも明るい。樹木のこんもりと茂つた島の影も見える。

小高い途が少しづつ降り始めて、野尻の村へ入つて行つた。何處にも昔の宿驛の跡が殘つてゐた。見世屋があり、舊い大きな邸があり、それが大方皆戸を閉ぢてゐる。日は少しづつ光を增して來た。湖面は少しづつ其の光を照り返して、周圍の綠がきら〳〵と輝き出した。私は急いで、家と家との間から稻田へ出て、畔の小徑を湖水の岸まで歩いて行つた。

（旅　路）

二　翼

私は小高い丘の上に立つてゐた。

澄みきつた晩秋の空は紫紺の色をたゝへて、無數の星が光つてゐた。大空の半圓は遠く野の果を限つて、ほの暗い野の面には、低く風が流れて行くのか、藪の枯草がかさ〳〵鳴つてゐた。大空は胸を現して、冷たい夜氣に慄へてゐた。

私は丘の上の草の中に腰をおろして、ぢつとしてゐた。すうつ、すうつと草の葉がすれ合つて、下の野の方からは、蟲の聲が聞えて來た。

月の昇る前の東の空には、淡青い光が漂つて、榎の葉の落ちた枝が、細い幾本もの指を伸して、その光をつかむやうにし

てゐた。

どこか頭の上で「さあつ、さあつ」と空氣を切つて飛ぶ物音がする。はつと思つて、私は頸をすくめて見上げた。はつきり見きはめられないが、淡黑い光の影の列をなして行くのが目にはいつた。「さあつ、さあつ」と翼の音が斷續する。空氣が搖れて、顏に露が冷たくあたる。と思つてゐると、心が妙に跳るやうで、胸の動悸が高くうちだした。體(カラダ)ぢゆう波立つて血がめぐる。どつき、どつき、鼓動する心臟の響と、「さあつ、さあつ」と空氣を切る翼の音とは、調子を合はせて鳴つてゐた。

翼の音が少し遠くなり、幽になつて、その物音の中心が空を

滑つて、先へ〳〵と移つて行くと、冷たい空氣は幾重にも幾重にも輪を描いて波動を起し、その波動は次第に大きくなつて、丘の上に、野の草の葉先の末にも及んで行くと、蟲の聲はその波動に連れて調子を取り、草の葉は同じく波立つて搖れた。黑い空氣の波の震動。私の心臟もその中に包まれて、緩く皷動を立ててゐた。

ぼうつと野は明るくなつた。森の影が長く黑く黃枯れた草の上に敷かれて、蟲は今日を覺したやうに爭つて聲を立てた。

私は月の方へ向かつて、胸へ深く光を吸ひこんだ。月の光の下に、瓦の屋根の並んでゐる都會が見えだして來た。い

つもは騷がしい響の聞えてゐる都會が、その夜に限つて何の物音も立てなかつた。たゞ黑く見えてゐるばかりで、燒跡か何かのやうだ。

淡青い光を空に擴げて、次第に月は昇つて來た。丘の下の野も一層廣く明るくなつて、藪がぽつりぽつり立つてゐるのも見えた。震へるやうな水溜も見えた。光の波が、今度は空にも地上にもみなぎり溢れてゐた。私の體の細い血管の中にも、波がくゞり入つて、體全體がすつきり透りでもするやうな氣がする。

私は暫くぢつとして立つてゐた。

「さあつ、さあつ」とまた物音が空に聞えてゐた。私はまたは

つと思ふと、動悸が強くうちだした、何ものかの襲來を受けたやうに。頭を仰向けたが、その物音の姿は見えない。が、前よりも一層近くその音は聞えて來た。一層低く、私の體よりも一層低く、丘の中腹を掠めて行くやうだ。

私はその響のくる方へ、鋭く視線を向けた。雁の群だ。十羽許の雁が横に並んで、緩く羽根をうちながら翔つて行く。右の端にゐる一羽の鳥が、他のものよりも少し先へ出て、時時頸を左右に動かし、頭を高く昂げて、勢よく舞つて行く。群鳥の背を滑つて視線が少し先の草原に落ちると、そこには舞行く鳥の影の、草原の上を斜に流れるのが見える。野の果の低い空には、大きな星が、澄んだ光できら〳〵してゐ

るのも見える。

大きな鳥の一隊の群、若い羽ばたき、動く長い頸、その一團の生命の波動を身近に感ずると、私は怖しさと不思議さとに、思はず聲を立てようとした。周圍が暗くなつて、たゞ暗い音の波動だけが、空にも地にも充ちてゐるやうな氣がした。暫くたつた。見ると、雁の群はもうやゝ遠く隔つて、羽ばたいてゐるとも思はれない。たゞ淡黑いものが、ずん〳〵空を流れて行くやうだ。光の波をかき亂し、音と光とが空に亂れて、不思議な波動を起し、睡つてゐる地上の草木や人家の屋根に、奇妙な韻律を響かせて行くのだ。

鳥の過ぎた後の野原は、またひつそりとして、月の光が枯草

の根元までも、根元の土の小さな塊にまでもさしこんで、大地の胸は、冷たい冷たいその光を飽くまでも吸つてゐた

芥川龍之介

明治二十五年東京市京橋區に生れた。東京帝國大學英文科を卒業の後、文壇の人となり夏目漱石の指導をうけた。小說隨筆の作が多い。昭和二年歿す、年三十六。

一　トロッコ　（自修文）

小田原熱海間に、輕便鐵道敷設の工事が始まつたのは、良平の八つの年だつた。良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行つた。工事――といつた所が、唯トロッコで土を運搬する――それが面白さに見に行つたのである。

トロッコの上には土工が二人、土を積んだ後に佇んでゐる。トロッコは山を下るのだから、人手を借りずに走つて來る。煽るやうに車臺が動いたり、土工の袢纏の裾がひらついたり、細い線路がしなつたり――良平はそんなけしきを眺めながら、土工になりたいと思ふ事がある。せめては一度でも土工と一しよにトロッコへ乘りたいと思ふ事もある。トロッコは村外れの平地へ來ると、自然と、其處に止まつてしまふ。と同時に土工たちは、身輕にトロッコを飛降りるが早いか、その線路の終點へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し〳〵、もと來た山の方へ登り始める。良平はその時乘れないまでも、押す事さへ出來たらと思ふのである。

或夕方――それは二月の初旬だつた。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いてある村外れへ行つた。トロッコは泥だらけになつたまゝ、薄明るい中に竝んでゐる。が、その外は何處を見ても、土工た

ちの姿は見えなかつた。三人の子供は恐る〳〵、一番端にあるトロッコを押した。トロッコは三人の力が揃ふと、突然ごろりと車輪をまはした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかつた。ごろり、ごろり――トロッコはさう云ふ音と共に、三人の手に押されながらそろ〳〵線路を登つて行つた。

その内に彼是十間程來ると、線路の勾配が急になり出した。トロッコも三人の力では、いくら押しても動かなくなつた。どうかすれば車と一しよに、押戻されさうにもなる事がある。良平はもう好いと思つたから、年下の二人に合圖をした。

「さあ乘らうか。」

彼等は一度に手をはなすと、トロッコの上へ飛乘つた。トロッコは最初徐ろに、それから見る〳〵勢よく、一息に線路を下り出した。その途端に突當

りの風景は、忽ち兩側へ分かれるやうに、ずん〳〵目の前へ展開して來る。顔に當る薄暮の風、足の下に躍るトロッコの動搖――良平は殆ど有頂天になつた。

しかしトロッコは二三分の後、もと〳〵の終點に止まつてゐた。

「さあ、もう一度押すのだい。」

良平は年下の二人と一しよに、又トロッコを押上げにかゝつた。が、まだ車輪も動かない内に、突然彼等の後には、誰かの足音が聞え出した。のみならずそれは聞え出したと思ふと、急にかう云ふ怒鳴り聲に變つた。

「この野郎！　誰に斷つてトロに觸つた。」

其處には古い印袢纏に、季節外れの麥藁帽をかぶつた、背の高い土工が佇んでゐる。

――さう云ふ姿が目にはいつた時、良平は年下の二人と一しよに、もう五六

間逃げ出してゐた。――それぎり良平は使の歸りに、人氣のない工事場のトロッコを見ても、二度と乘つてみようと思つた事はない。唯その時の土工の姿は、今でも良平の頭の何處かに、はつきりした記憶を殘してゐる。薄明りの中に仄めいた小さい黄色い麥藁帽――しかしその記憶さへも年毎に色彩は薄れるらしい。

その後十日餘りたつてから、良平は又たつた一人、午過ぎの工事場に佇みながら、トロッコの來るのを眺めてゐた。すると土を積んだトロッコの外に、枕木を積んだトロッコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登つて來た。このトロッコを押してゐるのは、二人とも若い男だつた。良平は彼等を見た時から、何だか親み易いやうな氣がした。この人たちならば叱られない。――彼はさう思ひながら、トロッコの側へ駈けて行つた。

「をぢさん。押してやらうか。」

その中の一人、――縞のシャツを着てゐる男は、俯向きにトロッコを押した儘、思つた通り快い返事をした。

「おゝ押してくれよう。」

良平は二人の間にはいると、力一杯押始めた。

「われは中々力があるな。」

他の一人――耳に卷煙草を挾んだ男も、かう良平を褒めてくれた。

その内に線路の勾配は、だん〳〵樂になり始めた。「もう押さなくとも好い。」――良平は今にも云はれるかと内心氣がかりでならなかつた。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したぎり、默々と車を押續けてゐた。良平はとうとうこらへ切れずに、おづ〳〵こんな事を尋ねて見た。

「何時までも押してゐて好い？」

「好いとも。」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ。」と思つた。

五六町餘り押し續けたら、線路はもう一度急勾配になつた。其處には兩側の蜜柑畑に、黄色い實がいくつも日を受けてゐる。

登り路の方が好い、何時までも押させてくれるから――良平はそんな事を考へながら、全身でトロッコを押すやうにした。

蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りになつた。縞のシャツを着てゐる男は、良平に「やい、乘れ。」と云つた。良平は直に飛乘つた。トロッコは三人が乘り移ると同時に、蜜柑畑の匂を煽りながら、ひた辷りに線路を走り出した。押すよりも乘る方がずつと好い――良平は羽織に風を孕ませながら、當り前の事を考へた。行きに押す所が多ければ、歸りに又乘る所が多い――さうも考へたりした。

竹藪のある所へ來ると、トロッコは靜に走るのを止めた。三人はまた前の

やうに、重いトロッコを押し始めた。竹藪は何時か雜木林になつた。爪先上りの所々には、赤錆の線路も見えない程、落葉のたまつてゐる場所もあつた。その路をやつと登り切つたら、今度は高い崖の向ふに、廣々と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、餘り遠く來過ぎた事が急にはつきりと感じられた。

三人は又トロッコへ乘つた。車は海を右にしながら、雜木の枝の下を走つて行つた。しかし良平はさつきのやうに、面白い氣もちにはなれなかつた。もう歸つてくれゝば好い――彼はさうも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければトロッコも彼等も歸れないことは、勿論彼にもわかり切つてゐた。

その次に車の止まつたのは、切崩した山を脊負つてゐる藁屋根の茶店の前だつた。二人の土工はその店へはいると、乳呑兒をおぶつた神さんを相手

に、悠々と茶などを飲み始めた。良平は獨りいら〳〵しながら、トロッコのまはりをまはつて見た。トロッコには頑丈な車臺の板に、跳ねかへつた泥が乾いてゐた。

暫くの後茶店を出て來しなに、卷煙草を耳に挾んだ男は、(その時はもう挾んでゐなかつたが)トロッコの側にゐる良平に新聞紙に包んだ駄菓子をくれた。良平は冷淡に「有難う」と云つた。が直に、冷淡にしては、相手にすまないと思ひ直した。彼はその冷淡さを取繕ふやうに、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には、新聞紙にあつたらしい石油の匂がしみついてゐた。

三人はトロッコを押しながら緩い傾斜を登つて行つた。良平は車に手をかけてゐても、心は外の事を考へてゐた。その坂を向うへ下り切ると、又同じやうな茶店があつた。土工たちがその中へはひつた後、良平はトロッコに腰をかけながら、歸る事ばかり氣にしてゐた。茶店の前には花のさいた

梅に、西日の光が消えかゝつてゐる。もう日が暮れる——彼はさう考へると、ぼんやり腰かけてもゐられなかつた。トロッコの車輪を蹴つて見たり、一人では動かないのを承知しながらうん〳〵それを押してみたり——そんな事に氣もちを紛らせてゐた。

所が土工たちは出て來ると、車の上の枕木に手をかけながら、無造作に彼にかう云つた。

「われはもう歸んな。おれたちは今日は向う泊りだから。」

「あんまり歸りが遲くなると、われの家でも心配するから。」

良平は一瞬間呆氣(アッケ)にとられた。もう彼是暗くなる事、去年の暮母と岩村まで來たが、今日の途はその三四倍ある事、それを今からたつた一人、歩いて歸らなければならない事——さう云ふ事が一時にわかつたのである。良平は殆ど泣きさうになつた。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いてゐる

日金山　伊豆山の西嶺熱海の背面の山

場合ではないとも思つた。彼は若い二人の土工に、取つて附けたやうな御辭儀をすると、どん〳〵線路傳ひに走り出した。

良平は暫く無我夢中に線路の側を走り續けた。その内に懷の菓子包みが、邪魔になる事に氣がついたから、それを路側へ抛り出す序に、板草履も其處へ脫捨ててしまつた。すると薄い足袋の裏へ、ぢかに小石が食ひこんだが、足だけは遙に輕くなつた。彼は左に海を感じながら、急に坂路を駈登つた。時々涙がこみ上げて來ると、自然に顏が歪(ヒズ)んで來る――それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくう〳〵鳴つた。

竹藪の側を駈拔けると、夕燒けのした日金山の空も、もう火照が消えかゝつてゐた。良平はいよ〳〵氣が氣でなかつた。往きと返りと變るせゐか、景色の違ふのも不安だつた。すると今度は着物までも、汗の濡れ通つたのが氣になつたから、やはり必死に駈け續けたなり、羽織を路側へ脫いで捨てた。

蜜柑畑へ來る頃には、あたりは暗くなる一方だつた。命さへ助かれば――良平はさう思ひながら、辻(スヂ)つてもつまづいても走つて行つた。

やつと遠い夕闇の中に、村外れの工事場が見えた時、良平は一思ひに泣きたくなつた。しかしその時もべそはかいたが、とう〳〵泣かずに駈續けた。

彼の村へはいつて見ると、もう兩側の家々には、電燈の光がさし合つてゐた。良平はその電燈の光りに頭から汗の湯氣の立つのが、彼自身にもはつきりわかつた。井戸端に水を汲んでゐる女衆や、畑から歸つて來る男衆は、良平が喘(アヘ)ぎ〳〵走るのを見ては、「おいどうしたね。」などと聲をかけた。が、彼は無言の儘、雜貨屋だの、床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼の家の門口へ駈けこんだ時、良平はとう〳〵大聲に、わつと泣出さずにはゐられなかつた。その泣聲は彼の周圍へ、一時に父や母を集らせた。殊に母は何とか云ひながら、良平の體を抱へるやうにした。が、良平は手足をも

がきながら、啜り上げ啜り上げ泣續けた。その聲が餘り激しかつたせゐか、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集つて來た。父母は勿論その人たちは、口々に彼の泣く譯を尋ねた。しかし彼は何と云はれても泣立てるより外に仕方がなかつた。あの遠い路を駈通して來た今までの心細さをふり返ると、いくら大聲に泣續けても足りない氣もちに迫られながら。

良平は二十六の年、妻子と一しよに東京へ出て來た。今では或雜誌社の二階に、校正の朱筆を握つてゐる。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのにその時の彼を思ひ出す事がある、全然何の理由もないのに。——塵勞に疲れた彼の前には、今でもやはりその時のやうに、薄暗い藪や坂のある路が、細々と一すぢ斷續してゐる。

（芥川龍之介集）

雨月物語
江戸時代の文學者上田秋成の怪奇小説集

豐臣秀次
秀吉の養子、事によつて秀吉の怒を買ひ高野山に自刄した

高濱虚子

本名は清といひ、明治七年愛媛縣松山市に生れた。俳人、文章家。小説・句集・隨筆の著が多い。

一　佛法僧鳥

雨月物語を見た人は、高野山といへば一番に佛法僧鳥の事を思ひ浮べるであらう。此の鳥は日本國中、二三の名山のほか居らぬ鳥で、中にも高野の奥の院に啼くのが特に名高い。其の啼聲がぶつ、ぽふ、そう、と聞えるさうで、法（ノリ）の御山にふさはしい靈鳥として、特にもてはやされて居る。上田秋成は此の鳥に豐臣秀次の幽靈を配して、雨月物語の一章として居る。其の物語は、趣味ある文字として嘗て愛誦した

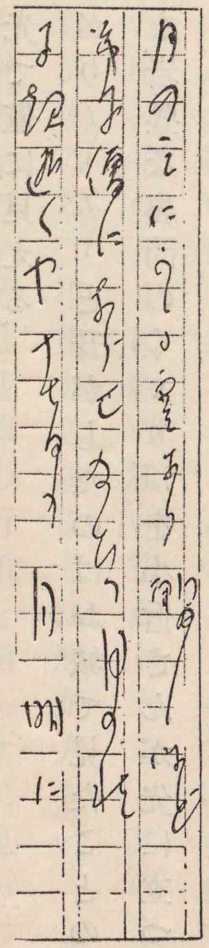
事があつた。

夕飯をすませて、「今夜奥の院に行つて佛法僧の啼聲を聞いて來るから、提灯を貸してくれ給へ」と給仕の小僧さんにいふと、「かしこまりました」と、小僧さんは笑ひながら膳を運んで下りて行つたが、いくら待つても來ない。一時間も經つてから、「本當に行くのですか」と聞きに來る。「勿論本當に行くさ」と答へると、「途中で何か出ますよ」といふ。「何が出る、猿でも出るか」と聞くと、「新墓から幽靈が出ますよ」といふ。晝間通つて見た時は、大名などの古い墓ばかりが目についたが、なるほど中には新墓もあらう。「新墓の幽靈くらゐ怖いものか」と元氣な事をいうてやる。小僧さんは、又薄氣味

野ぶすま　むさゝびの方言

虛子筆蹟　高濱虛子　月のみにかゝる雲あり暫しほど　弟子僧にならせ給ひて月の秋　子規逝くや十七日の月明に

の惡い厭な笑ひやうをして降りて行つたが、暫くして二つ巴の紋のついて居る大きな提灯を持つて來る。さうして、「幽靈の外に野ぶすまも出るさうですから、氣をおつけなさい。若し二時間も經つておの



虛子筆蹟

歸りが無かつたら、お迎へに行きます」と仰山な事をいふ。小僧さん自身で提灯をつけてくれて、「表門は締めてしまつたから、裏口から御案内しませう」と先に立つ。此の小僧さんは十六だといふに、馬鹿に脊が低い。それが大きな提灯

土蜘蛛
源頼光が土蜘蛛の怪を退治する芝居

を提げてゐるので、少くとも芝居の「土蜘蛛」に出て來さうな恰好だ。下駄を穿いて臺所の横にまはる。廣い臺所には灯が一つともつて居るばかりだ。暗闇の中に、二三人の小僧さんが笑ひながら我等を見送つて居る。それが提灯の光で僅に見える。

がり〳〵〳〵と音がしたのは、お城で見たことのあるやうな岩疊な裏門のくゞり戸を小僧さんが先に立つて開けてくれた時、鐵の鎖が戸にきしる音であつた。小僧さんが突出す提灯を受取りながら、未央君と二人で表に出る。表は暗い。星はあるが僅に寺の白い土塀と道との區別がつく位だ。提灯を便りに、其の白い土塀に沿うて表通の奥の院

道に出る。

門前の珠數屋ももう戸をおろして居る。一の橋を渡ると眞暗な杉木立になる。亭々として天を摩すといふやうな大木が、襖(フスマ)の如く連なつてゐる。其の左右の襖でたて切つた中に、帶のやうに幅の狹い空が見える。其の空には星が光つてゐる。平生見る星よりは形が大きい。しかも其の一帶の星の光では、我等の行手を照らすに足らぬ。われ等は提灯の光で、僅に足許を探つて歩く。晝間は氣が附かなかつたが、縱横に道を横ぎつてゐる木の根の夥しいのに驚かれる。其の木の根は左右に延びるに從つて隆起して、終に杉の大木に集つてゐる。未央君は提灯をさし上げて、其

の杉の幹に推しつけるやうにして歩く。未央君が三間ばかり歩いても、まだ杉の半面を照らし盡くさぬ。夜の杉は大きさのわからぬ巨人の如く突立つて居るのである。寢鳥の立つ音がする。見ると提灯の上から圓筒の如く圓い光が空中に射出されて、それが高い〳〵杉の梢をうろついて居る。寢鳥が泡を食ふのも尤だ。

歩きながら、未央君に雨月物語の話をする。墓原の中に裸火らしい火が二つともつて居る。何處やら心細くなる。かういふ時に野ぶすまが道をふさぐのだらうと考へる。裸火が見えなくなる。今度は杉木立のずつと奥に、うすぼんやりと明るいものが見える。何であらうかと氣にしな

御廟の橋　御廟とは弘法大師の廟、奥の院谷に在る、その前の流にかゝつてゐる橋

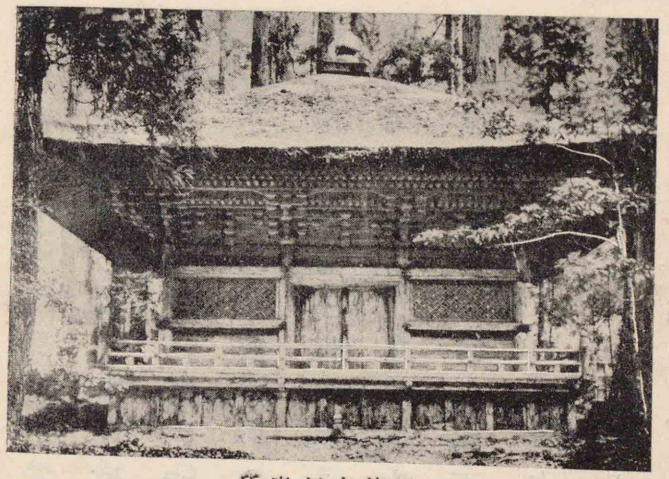
玉川　御廟の側を流れてゐる溪流

燈籠堂　御廟の拜堂、一名拜殿、多くの燈籠があつて獻燈する、中に弘法大師入定後、祈願上人の獻ぜられた一燈が今に滅しない、又之に對して白河法皇御幸の時自ら一燈を獻ぜられたものがある

がら行くと、突然木の間に空が見えて、其處に鎌のやうな三日月がかゝつて居る。

向ふから、ふら〳〵と提灯が一つ來る。急に見えなくなるのは、杉の木に隱れるのであらう、すぐ又現れる。近づいて見ると一人の老僧だ。すれ違ひ樣によく見ると、釣狐の狂言に出る白藏主に似てゐる。行手に燈籠らしい灯が點つて居る。近寄つて見ると御廟の橋だ。未央君が橋の上から提灯をつり下げて、水面を照らしてゐる。玉川の水は光を受けてちら〳〵と流れてゐる。燈籠堂はもうすぐ其處にあるはずだが、眞暗でそれらしいものは見えぬ。怪みながら近よつて見ると、すつかり四周の蔀(シトミ)をおろして、寂然と

して寢靜まつてゐるやうだ。數百の燈籠の、ともに連なつてゐる夜の景色は、淋しくも嚴かであらうと思つて樂みにしてゐたのに、これでは唯眞黑な大きな建物を見るばかりで物足らぬ。燈籠堂に沿うて御廟の前に出る。御廟の前も眞暗だ。たゞ廟前に左右六個の小さい釣燈籠がともつてゐる。其の光で僅に御廟の屋根と、二三本の杉と、線香立とが見える。此の線香立には晝間見たときは煙が雲の如く渦



弘法大師廟所

法隆寺 大和國生駒郡にある

卷いてゐた。其の煙の中に珠數をくすべたり鈴をくすべたりしてゐる信者が、一人も見當らぬ。人間が居らぬばかりでなく、今は一條の煙も昇つて居らぬ。提灯を其の中に突込んで覗いて見ると、冷くなつた灰の中に、線香の燃滓(モエカス)の赤い紙が四五本殘骸をとゞめてゐるに過ぎぬ。晝間見た時も大きな線香立だと思つたが、寂然として靜まりかへつたところを見ると、愈〻偉大な線香立である。

燈籠堂の裏側の縁に腰をかける。我等を少し離れて縁に置かれた提灯の光が、心細さうにまたゝいてゐる。遠方で鉦を叩くやうな音が聞える。法隆寺の境内ででも聞えさうなよい音だ。方角は御廟の後に當る。そんな方に寺は

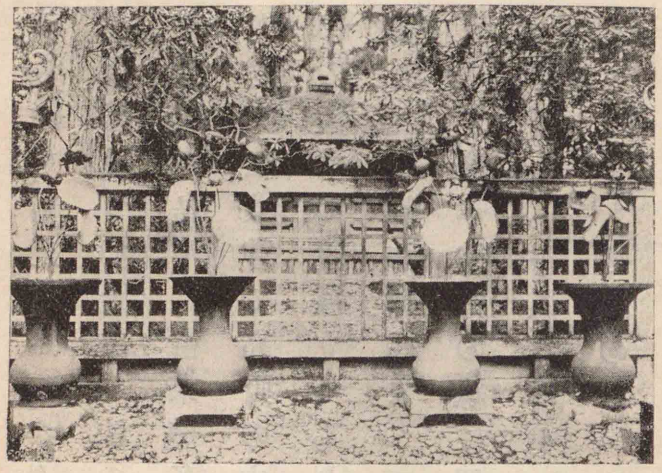
無いはずだが、不思議だと思ふ。其の鉦の音に聽きほれてゐると、忽ち近い木の梢でけたゝましい鳴聲が起る。何でも朽木を引裂くやうな殺氣を帶びた聲だ。襟元から手を突込んで背中ぢうを掻きまはされたやうな氣持になる。鉦の音はまだ聞えて居る。鉦の音はよい音だが、今の鳴聲は眞平だと思つてゐると、又前よりも一層激しいやつが起る。或は天狗のやうな嘴をした、鬼のやうな手をした鳥で、忽ち空中から落下し來つて提灯をさらつて行くやうな事はあるまいかと氣になる。氣のせゐか、提灯の光は一層心細さうに瞬いて居る。

小さい咳拂が聞える。おやと思ふうち、又一つ聞える。其

の邊に目を配つて見ると、燈籠堂の片隅の障子に、ちよつとした明りがある。こゝは晝間線香などを賣つてゐた處であるから、直ちに番人の部屋と想像がつく。試に其の傍に行つて「もし〳〵」と呼んで見る。「へい」と返事をする。「一寸伺ひますが、あの恐ろしい啼聲をする鳥は何といふ鳥ですか」と聞く。「あれは鳥ぢやない、獸です」といふ。「へえ。何といふ獸です」と聞くと「野ぶすまと言うて、蝙蝠のやうな、鼬(イタチ)のやうな、妙な恰好をした獸です」といふ。あれが野ぶすまかと合點がゆく。「それから遠方で鉦が鳴つて居るやうですが、あれは何處ですか」と聞く。番人は一寸だまつてゐたが、「あれは鉦ぢやありません、鳥です。あれが名高い佛法僧と

いふ鳥です。といふ。鉦の音かと思つてゐたのが、鳥の鳴聲であつたのは意外であつた。殊にそれを聞かう爲に來た佛法僧であつたのは愈〻意外であつた。「あれが佛法僧ですか。」といつたまゝ、暫く無言で二人とも耳を傾けた。やはり、かん〳〵〳〵と、鉦の音のやうな響に聞える。唯さう思つて耳を澄ますと、かんと響く前に、ぶつといふ低い音が聞える。ぶつと低く響いてから、かんと高い冴えた聲が響く。つまり、「ぶつかん、〳〵」と鳴いてゐるやうに聞える。多くの書物には、文字通り佛法僧と鳴くとあるが、雨月物語には佛法といふ字に態々「ぶつぱん」と假名が振つてあつて、「ぶつぱん、〳〵」と鳴くと書いてあつたやうに記憶する。實際

の鳴聲は「ぶつかん、〳〵」と聞えるが、先づ雨月物語の「ぶつぱん」に近いやうだ。妙なもので、初は鉦の音と信じてゐたのが、鳥の聲と聞いてからは、まさしく鳥の聲らしく聞えて來た。非常によい音だ。初め鉦の音と聞いた時も、嘗て法隆寺で聞いた金鈴の響を聯想したが、これが生物の喉から出る聲だと知つてから、其の金鈴の響に濕ひのあることに氣がつく。番人が「大概夜中の二時か三時頃にならんと鳴かん



高野山奥の院

のに、今晩は宵の口から頻に鳴いて居た」といふ。さういふうちにも、絶えず「ぶつかん、ぶつかん」と聞える。普通の聲とは餘程違つて居る。法の御山の靈鳥として恥かしからぬ不思議な鳥だ。古來幾多の詩歌がこれを持て囃したのも尤だ。私は嘗て高野の山の靈山であることは奥の院道の杉の大木で證據立てられるといつたが、否々杉はものかは、獨り此の佛法僧によつて證據立てられるといつてよい。見ると、遙か彼方の緣に置かれた提灯の光も今は靜にともつて居る。番人は淋しい燈籠堂の夜陰に偶〻話相手を得たので、問ひもせぬのにいろ〳〵話をする。どの話も耳新しく面白かつたが、中にも、此の燈籠堂で焚く油はおびたゞし

御影供の時

御影堂なる弘法大師の畫像を祭る日、毎年舊曆三月二十一日、前日から行事がある

い事で、月に一石から二石の間を往來して居る。殊に三月二十一日の御影供の時は、一日に一石の油を焚くといふ事と、貧女の一燈の灯は信者の所望によつて線香に移してやる、それを遙に北海道や九州あたりまで持つて歸る、中には途中で消えたといふので、大阪あたりから又引返して來る人もあるといふ事などは面白かつた。

ふと氣がつくと佛法僧はいつの間にやら鳴かぬやうになつてゐた。たゞ野ぶすまが時々荒膽をひしぐやうな鳴聲をする。

歸途につく。御廟の橋にかゝつた時、未央君が「また鳴く」といふ。向ふの墓原を、縫ふやうに提灯が一つ來る。女が三

人に男が一人「南無大師遍照金剛」と唱へつゝ水向地藏の前を通る。

（十五代將軍）

水向地藏 御廟の橋の東傍に在る、地藏尊五體、其他二體の佛像を安置する、前に石盤あり、玉川の清水を引いて注ぐ、參詣の人は其の水を此の佛に向けるが習はしである

二　柿二つ

ランプの光は靜に更けて行つた。時々上野の森に反響して轟き過ぐる汽車の音があるばかりで、根岸の夜は沈んだやうに淋しかつた。

根岸 東京市下谷區上野公園の東北に近い町

日によつて不定ではあるけれども、この頃は一體に彼の熱は夜に入つて下ることが多かつた。夜中頃から再び上るのではあるが、その平熱になつた時の心持は、流石にすがすがしかつた。病主人の頭は、さういふ時に一層透明になる

のであつた。彼は自分を神かと疑ふばかりの明快な判斷を、數かぎりない句の上に下すことが出來た。句の良否は色の黑白の如く明白に、一見して立ちどころに判斷することが出來た。自分で自分をあやしむくらゐに、それが容易に且迅速であつた。

正岡子規

彼 正岡子規、俳人、明治三十五年歿、年三十六

彼の淋しい家庭には、六十を過ぎた老母と、今年二十七になつてまだ嫁がない妹とがあるばかりであつた。老いたる母も、嫁期を失した妹も、唯

主人の病をみとるために生きてゐた。二人は次の室の暗いランプの下で、病室の物音に耳を欹(ソバ)てながら、各〻默つて針を運んでゐた。

やがて妹は膝の絲屑を拂つて立上つた。それは病主人の枕許に、盆に載せた柿を運ぶためであつた。

「もうこれきりかい」。

と、彼はながし目に、その盆の柿を見ながら聞いた。

「昨日あんなにお食べだから、もうこれぎりよ」。

と、妹は答へた。盆の上には、たゞ二つしか載つてゐなかつた。

彼は總べてのものに健啖であつたが、殊に果物を好んで食

つた。中にも柿は飽くことを知らなかつた。

彼は忽ち食指が動いたのだが、たゞ二つの柿を今食つてしまふことは心細かつた。それは是非とも今日の大事業——投書函の一掃——が完了した時の慰藉の料に、取つて置かねばならなかつた。彼は心のうちでつぶやいた。

「選がすんでしまつたら、この柿を御褒美に遣るよ。今一息だ。たゆまずに片附けてしまへ」。

と。かくて漸く底の見えて來た句稿の選に、更に一心不亂に取掛つた。

燈火は主人の心を知るかのやうに、またゝきもせずさえ渡つた。傍の火鉢に炭のつがれた事も、時計が十二時を打つ

た事も、老いたる母の寢床に入つたことも、彼は知らぬではなかつたが、それらは餘り深くその注意を引かなかつた妹が床に入つたのはそれから一時間も後であつたが、それはその物音が兄の仕事の妨にならぬやうに、何時ふせつたとも分らぬくらゐひそやかであつた。

靜な沈んだ夜の呼吸が聞えた。彼の目は燈火に光り輝いて、この夜の色の中にひとり帝王のやうな威を示してゐた。最後に手に當つた草稿を見終つて後、彼は念のため投書函を搔探して見たが、もう其處には一枚も留めなかつた。彼は朱筆を投げ棄てたまゝ、兩手で頭を抱へて暫く身動きもしなかつた。

久しく心に掛つてゐた仕事を片附けてしまつた慄へるやうな滿足の情と、病軀に不相應な努力のあとに來る疲勞の恐れとで、彼の心は暫く搔亂されてゐた。が、やがてその頭を抱へてゐた手をほどいて、蒲團の外に現した彼の顏は、いよいよ興奮して、蒼白い皮膚の中にも、頰のあたりの赤みは色を增してゐた。

もう時計は二時を過ぎてゐたが、彼は少しも睡いとは思はなかつた。燈火を中心としたこの病床六尺の天地は、今は何物にも煩はされることのない、極めて自由な、希望に充ちた世界のやうに思はれた。今や彼の體溫は再び上つて、その爲に、いつもの酒に醉つて興奮したやうな心持になつて

愚庵
俗名天田五郎
明治三十七年寂、年五十一

天田愚庵

ゐるのであるといふ事には、氣がつかうともしなかつた。彼は煩はしげに盆の上の柿を見やつた。柿の赤い色は媚びるやうに輝いてゐた。抑へてゐた彼の食欲は猛然として振ひ起つた。彼は餓ゑた虎が殘忍な眼を光らせて兎を摑むやうに、忽ちその柿の一つを取上げて、皮をむき始めた。この柿は、京都伏見の桃山に庵を結んでゐる愚庵といふ禪僧から贈つて來た、釣鐘といふ珍しい名の柿であつた。さういへば形がどこか釣鐘に似てゐた。この禪僧といふのは、維新の戰亂に生死不明になつてしまつた

天龍寺
京都五山の一
臨濟宗の巨刹

峨山和尚
俗名橋本昌禎
明治三十三年寂、年四十九

母と妹の行方を、何十年かの間探したが、遂に見當らなかつたことが動機となつて、中年から京都天龍寺の峨山和尚について僧となつた人であつた。主人は既に數年前から交遊があつたのであるが、この禪僧も主人と同じく肺を病んでゐる上に、萬葉調の歌をよくし、又書に巧であつた。俳句は作らなかつたが、それらの關係から互に推重して、何かにつけて贈答を怠らなかつたのであつた。今度の柿は、桃山の草庵に禪僧を訪ねた人が、その庭前の柿を託されて、遙々と携へて歸つて病床に齎(モタラ)したものであつた。それは昨日の事であつた。その人がまだ枕頭に在る間に、彼はもう辛抱が出來なくなつて、その柿を三つ續けざまに

食つた。その人が歸つた後も、夜寢るまでに十ばかり平げた。今夜枕頭に運ばれたものは、その殘りのたゞ二つであつた。彼はその一つを取つて皮をむくより早く、忽ちそれに武者振りついたのであつたが、もう大方食ひ盡して蔕の所に達した時、少し顏をひそめた。それは稍〻澁かつたのであつた。さういへば昨日食つたのも大方は少しづつ澁かつたのであつた。けれども彼はそれに頓着せず、その蔕の所の際まで少しも殘さずに食つてしまつた。

三千の俳句を閲し柿二つ

當用日記に、彼は毎日の出來事を句にして十句宛書くことを日課にしてゐた。明日になつて今日の部を認める時に、

忘れぬやうにこの句を加へねばならぬと思つた。疲勞が一時に出て來るやうに思はれて、頭がぐら〳〵した。彼は始めて熱の高いことを覺えたのであつた。（柿二つ）

正岡子規

名は常規といひ、慶應三年伊豫松山に生れた。新俳句を起した俳人。和歌の革新や寫生文の創始にも力があつた。俳句・隨筆に關する著書が多い。明治三十五年歿す、年三十六。

一　近郊の秋色

朝日障子にあたりて、蜻蛉の影あたゝかなり。世の人は上野・淺草・團子坂と浮かるめり。われも出でなんや、出でなん。

鶯横町　下谷區根岸にある
谷中　下谷區、上野公園の北につづく
飛鳥　飛鳥山、東京府下王子町
天王寺　谷中町にある、五重塔がある

病募らば募れ、待てばとて出でらるゝ日の來るにもあらねばこそ。「車呼びてこよ。」といふ。やがて歸りて、「車は皆出はらひたり。遠くに雇はんや。」といふ。「さまでは。今日の日和には足ある人ぞ先づ車にて出でたる。」と笑ふ。

一時過ぎて車は來つ。車夫に負はれて乘る。成るべく靜に挽かせて、鶯横町を出づるに、垣に咲ける紫の小さき花の名も知らぬが、まづ目につく。

空忽ち開く。村々の木立遠近につらなりて、右には千住の煙突四つ五つ黑き煙をみなぎらし、左は谷中・飛鳥の岡つづきに天王寺の塔聳えたり。見渡すかぎり眉墨ほどの山もなければ、平地の眺の廣き、我が國にてはこれほどの處外に

はあらじと覺ゆ。胸開き、氣伸ぶ。

田は半ば刈らずあり。刈りたるは皆田の緣に竹を組みてそれに掛けたり。我が故郷にては、稻の實ある頃は田の面乾きて水なければ、刈穗は悉く地干にするなり。此の邊の百姓は、落し水の味を知らざるべし。われには此の掛稻がいと珍らしく感ぜらる。榛の木にかけたるは殊に趣あり。

其の上より森の梢、塔の九輪など見えたる更に面白し。

道の邊に咲けるは蓼の花ぞ最も多き。其の紅の色の老いてはげかゝりたる中に、ところ〴〵野菊の咲きまじれる樣ふるひつくばかりうれし。

我が車の響に野川の水のちら〳〵と動くは、日高の群の驚

きて逃ぐるなり。あないとほし。目高を見るはわが野遊の目あての一つなるを、なべての人は目高ありとも知らで過ぐめり。世に愛でられぬを思ふにつけ、いよ〳〵いとほしさぞ優るなる。

小鮒にやあらん、すばやく逃げ隠れたる憎し。たま〳〵に蛭の浮きたるはなくもがな。

むかふより人力車來れり。見れば、男一人乘りて前に藁づとを置きたる、其の端より黄なる實の漏れて見ゆるは蜜柑か、金柑か。一足、町を離るれば、見るもの皆雅なり。

柿の樹に柿の殘りたるはあちこちにあり。一つくひたし。烏瓜の蔓に赤き實の一つだに殘りたるを見ず。

目高多き小川を過ぐ。

童二人、とある門の内より「人力々々」とわめく。

わざと新しき道を右に取りて川ぞひに行く。むかふより來る女の童の十ばかりなるが、手拭を被り、左手には竹にて編みたる大きなる物を持ち、右手には小桶に鮒を入れたるを持ちたり。眼白く涼しく、頬ふくやかにしまりて、いとけだかきさまは、世の常の鄙育ちの兒とも見えず。殊に其のさかしささへ目の色にあらはれて、なつかしさ限りなし。

足にして立たば、彼の童の後につきて、ひねもす魚捕るわざの伽にもなりなんと思ふ。せめては名だに聞かまほし。

かよちやんとは呼ばずや。

諏訪神社 日暮里町にある、道灌山の東

諏訪神社の茶店に腰を休む。日傾き、風俄に寒くなりたれば、興盡きて歸る。

（子規全集）

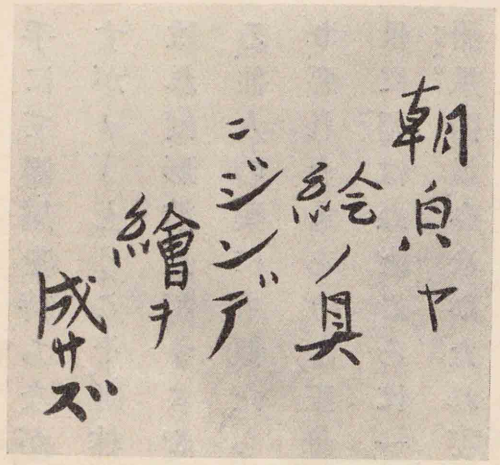
二　果物

果物ほど味の高く清きものはあらじ。小兒はこれを好み、仙人もこれを食ふとかや。青梅は酸くして口を絞れども、鹽少し許りつけんには、味ひ言難し。杏はからびて賤しく、李は水多くしてあさはかなり。苺は西洋苺を良しとす。されど行脚の足くたびれて草鞋の緒ゆるみたる頃、巖の角に腰打据ゑて、汗を拭ふ手の下に、端なく見附けて取り食ひたる、味は問はず、時に取りていとうれし。神戸に病みし時、

碧、虛二子 河東碧梧桐と高濱虛子

諏訪山 神戸市の北部にある。

物一つ咽喉を通らず、乳さへ飲みえぬに、わが爲にとて、碧、虛二子の、朝なゝ諏訪山の露を分けて、一籠の赤き玉をもたらしくれたる、いかばかりうれしかりしぞ。



正岡子規筆蹟

枇杷はうまけれど、種子大きく肉少きは飽かぬ心地す。桑の實はなべての人に知られねど、果物の中、これを外にして甘き物はなし。畫餉さへしたためずに貪りたる木曾の旅の思ひ出でらられて懷し。夏蜜柑、ザボンの類、俗を離れて涼し。さして良しとにはあらねど、少し病みて飯さ

へえたうべぬ時など、またなき物とぞ覺ゆる。

梨は涼しく潔し。南窓に風を入れて、柱に倚り、襟を披き、片手にて團扇を持ちながら一片を口にしたる、氷にも優りてすが〳〵しうこそ。林檎は北海の産を最上とす。齒にさはれば形消えて、すゞやかなる風味ばかり口の中に殘りたる、仙人の藥にも似たらんか。桃には種類多し。良きもあり、悪しきもあり。王母後園の風味は知らねど、すべて桃は世に詔(ヘウラ)はぬところに一段高き趣あり。

王母云々　西王母が漢武帝に桃をすゝめた故事

甜瓜(マクハウリ)・西瓜、ひなびたれど誠あり、捨難し。栗は賤し。甘藷と比べられたるも口惜し。柿は野氣多く冷やかなる腸を持ちながら、味はいと濃やかなり。多血性の人、世を厭ひて里

に隱れながら、なほ物に觸れて熱血を迸らすにもたとへんか。柚子は氣高けれど食ふべからず。石榴、無花果のわれから裂けたるは食ひ劣りぞする。

われこの夏頃よりわけて果物を貪り、物書かんとすれば必ずこれを食ふ。書きさして倦めば、又これを食ふ。食へば則ち心涼しく、氣勇む。氣勇めば、則ち想湧き筆飛ぶ。われ力を果物に借ること多し。

日ごと〳〵十顆の梨を食ひけり

朱硯に葡萄のからの散亂す

柿くうて洪水の詩を草しけり

（子規全集）

御最期川
神奈川縣三浦郡逗子町の田越川のこと

國木田獨歩

名は哲夫といひ、明治四年下總國銚子町に生れた。新聞記者より小説家に轉じて、多くの作品を殘した。明治四十一年歿す、年三十八。

一　御最期川

北風を背になし、枯草白き砂山の崖に腰かけ、足投出して、伊豆連山の彼方に沈む夕日の薄き光を見送りつゝ、沖より歸る父の舟遲しと俟つ逗子邊の童の心、その淋しさ、うら悲しさは如何あるべき。御最期川の岸邊に茂る葦の枯れて、吹く潮風に騷ぐ其の根がたには、夜半の滿潮に人知れず結びし氷、朝の退潮に破られて殘り、ひねもす解けもせず夕闇に

六代御前
平維盛の長子、平氏滅亡の後に出家し、僧文覺と反を謀り斬られた、年二十六

白き線を水際に引く。旅人若し、何心なく疲れし足を此のほとりに停めんか、四邊を見廻して、何等の感もなく行過ぎ得べきか。見かへれば、彼處なるは哀れを七百年の後にひく六代御前の杜なり。木がらし其の梢に鳴りつ。落葉を浮べて、ゆるやかに流るゝ此の沼川を漕ぎ上る舟、知らず、何れの時か心持よき追分の節面白く此の舟より響き渡りて、霜夜の前ぶれをかなしつる。あらず、あらず、たゞ見る、何時も何時も物言は

國木田獨歩

ぬ、笑はざる、歌はざる男子の、農夫とも漁人とも見分け難きが、淋しげに艪あやつるを。

鍬かたげし農夫の影の、橋と共に朧にこゝに映る。かの舟、音もなくこれを搔亂しゆく。見る間に、舟は葦がくれ去るなり。

日影なほあぶずりの端にたゆたふ頃、川口の淺瀨を村の若者二人、はだか馬に跨りて靜に歩ます畫めきたるを見ることもあり。かゝる時、濱には見わたす限り人らしきものの影なく、ひき上げし舟の艫に止れる鳥の、聲をも立てで、羽搏ちものうげに鎌倉の方さして飛びゆく。

（獨歩全集）

二　忘れ得ぬ人々

忘れ得ぬ人は必ずしも忘れて叶ふまじき人ではない。親とか、子とか、又は朋友知己、其の他自分の世話になつた教師先輩の如きは、畢竟單に忘れ得ぬ人とのみは言へぬ。忘れて叶ふまじき人といはなければならぬ。然るに、こゝに恩愛の契もなければ、義理もないほんの赤の他人であつて、本來をいふと、忘れてしまつたところで、人情をも義理をも缺かないもので、しかも終に忘れてしまふことの出來ない人がある。

僕が十九の歳の春の半頃と記憶してゐるが、少し身體の具合が悪いので、暫時保養する氣で、東京の學校を退いて國へ

歸るその途中のことであつた。大阪から例の瀬戸内通ひの汽船に乘つて、波穩かな春の内海を航するのであつた。が、殆ど一昔も前の事であるから、僕がその時の乘合の客がどんな人であつたやら、そんなことは少しも覺えてゐない。多分、僕に茶を注いでくれた客もあつたらうし、甲板の上で色々と話しかけた人もあつたらうが、今は何も記憶に殘つてゐない。何でも、その時は健康が思はしくないから、餘り浮き〳〵しないで、物思ひに沈んでゐたに相違ない。絶えず甲板の上に出て、將來の夢をゑがいては、この世に於ける人々の身の上の事などを思ひ續けてゐたことだけは、おぼろに記憶してゐる。勿論若い者の癖で、それに不思議はな

いが。

春の日の長閑な光が、油のやうな海面に融け、殆ど小波も立たぬ中を、船首が心地よい音をさせつゝ水を切つて進んで行く。それにつれて、霞たなびく島々を迎へては送り、迎へては送る右舷左舷の景色を、その時僕は眺めてゐた。菜の花と麥の青葉とで錦を敷いたやうな島々が、突然霞の奥に浮いてゐるやうに見える。その中に船が或小さな島を右舷に見て、その磯から十町とは離れない沖を通るので、僕は欄にもたれて、何心なく其の島を眺めてゐた。畑もなく家らしいものも見えない。寂として淋しい磯の退潮の跡が日に輝いて、小さな波が水際を弄んで居るらしく、長い線が

白刄のやうに閃いては消える。無人島でないことは、其の島の山よりも高い空で、雲雀の啼いて居るのが微に聞えるので分る。「田畑ある島と知れけりあげ雲雀」僕の老父の此の句を思ひ出して、山の上には人家があるに相違ないと僕は想像してゐた。

と見る中に、退潮の跡の日に閃いて居る處に、一人の人が居るのが目についた。確に男である。さうして子供ではない。何か頻に拾つては籠か桶かに入れて居る。僕は此の淋しい島陰の小さな磯を漁つて居る人をぢつと眺めてゐた。船が進むに連れて、人影が黑い點のやうになつて了つた。やがて磯も、山も、島全體が霞の彼方に消えて了つた。

三津ヶ濱
愛媛縣温泉郡

松山
愛媛縣松山市

其の後、今日が日まで殆ど十年の間、僕は何度この島陰の顏も知らない其の人を憶ひ起したらう。これが僕の忘れ得ぬ人々の一人である。

其の次は四國の三津ヶ濱に一泊して、汽船を待つた時のことである。夏の初と記憶してゐる。僕は朝早く旅館を出たが、汽船の來るのは午後と聞いたので、この港の海岸や町を散歩した。奥に松山を控へてゐるだけ、この港の繁昌は格別で、別して朝は魚市が立つので、魚市場の近傍の雜沓は非常であつた。大空は名殘なく晴れて、朝日が麗かに輝き、光るものには反射を與へ、色あるものには光を添へて、雜沓の巷を賑々しくしてゐた。呼ぶ、叫ぶ、喚く。笑聲・歡呼嬉々

としてこゝに起れば、咆吼・怒罵亂れてかなたに湧くといふ有様で、賣る者買ふ者、老若男女、いづれも忙しさうに、慌たゞしさうに、面白さうに、うれしさうに、駈けたり追つたりしてゐる。露店が竝んで、立食の客を待つてゐる。賣つてゐる品は言はずもがなで、食つてゐる人は大概船乘にきまつてゐる。鯛や比目魚（ヒラメ）や海鰻（アナゴ）や章魚（タコ）がそこらに投出してある。腥い臭が人々の立騒ぐ袖や裾に煽られて鼻を打つ。僕は全くの旅人で、此の土地には何のゆかりもない身だから、知る顏もなければ、見覺えの禿頭もない。そこでこれらの光景が何となく異様な感を起させ、世の中の有様を一段と鮮に眺めさせるやうな心地がした。僕は殆ど自己を忘

れて、此の雜沓の中をぶらぶらと歩き、やゝ靜な街の一端に出た。

すると、すぐ僕の耳に入つたのは琵琶の音であつた。其處の店先に一人の琵琶法師が立つてゐた。歳の頃は四十を五つ六つも越えたらしく、幅の廣い四角な顏で、丈の低い肥滿した男であつた。其の顏の色、其の眼の光は、丁度悲しげな琵琶の音にふさはしく、あの咽ぶやうな糸の音に連れて謠ふ聲が、沈んで濁つて淀んでゐた。巷の人々は一人も此の法師を顧みない、家々の者は誰も此の琵琶の音に耳を傾ける風も見せない。朝日は輝く、浮世は忙しい。

併し、僕はぢつと此の法師を眺めて、其の琵琶の音に耳を傾

けた。此の道幅の狹い、軒端の揃はない、且つ忙しさうな巷の光景が、此の法師とその琵琶の音に調和しないやうで、しかもどこかに奥深い調和があるやうに感ぜられた。あの嗚咽する琵琶の音が、巷の軒から軒へと漂うて、勇ましげな賣聲や、喧しい鐵砧（カナシキ）の音と混つて、別に一道の清泉が濁波の間を潜つて流れるやうなのを聽いてゐると、うれしさうな、浮き〳〵した、面白さうな、忙しさうな顔付をしてゐる巷の人々の心の底の糸が、自然の調を奏でてゐるやうに思はれた。僕の忘れ得ぬ人々の一人はこの琵琶法師である。

まだ幾らもある。北海道歌志内の鑛夫、大連灣頭の青年漁夫など、兎に角忘れることが出來ない。

僕は何故に此等の人々を忘れることが出來ないだらう。それは憶ひ起すからである。何故僕は憶ひ起すであらうか。僕は絶えず人生の問題に苦んでゐながら、又自己將來の大望に壓せられて自分で苦んでゐる。そこで夜更けて、僕は獨り燈に向つて靜思して居ると、其の時、僕の主我の角がぽきりと折れて了つて、なんだが人懷しくなつて來る。色々の古いことや友の上を考へ出す。其の時、油然として僕の心に浮んで來るのは此等の人々である。尙精しく言へば、此等の人々を見た時の周圍の光景の裡に立つ此等の人々である。さうして我と他と何の相違があるか、皆これ生を天地の間に享けて、悠々たる行路を辿り、相携へて無窮

の天に歸る者ではないかと云ふやうな感懷が心の底から起つて來て、我知らず涙の頰を傳ふことがある。實に其の時は我もなければ他もない。唯誰も彼も懷しくなつて偲ばれて來る。僕は其の時ほど心の平穩を感じることはなく、其の時ほど心の自由を感じることもなく、其の時ほど名利、競爭の俗念が消えて、總べての物に對する同情の念の深くなることはないのである。

（獨歩全集）

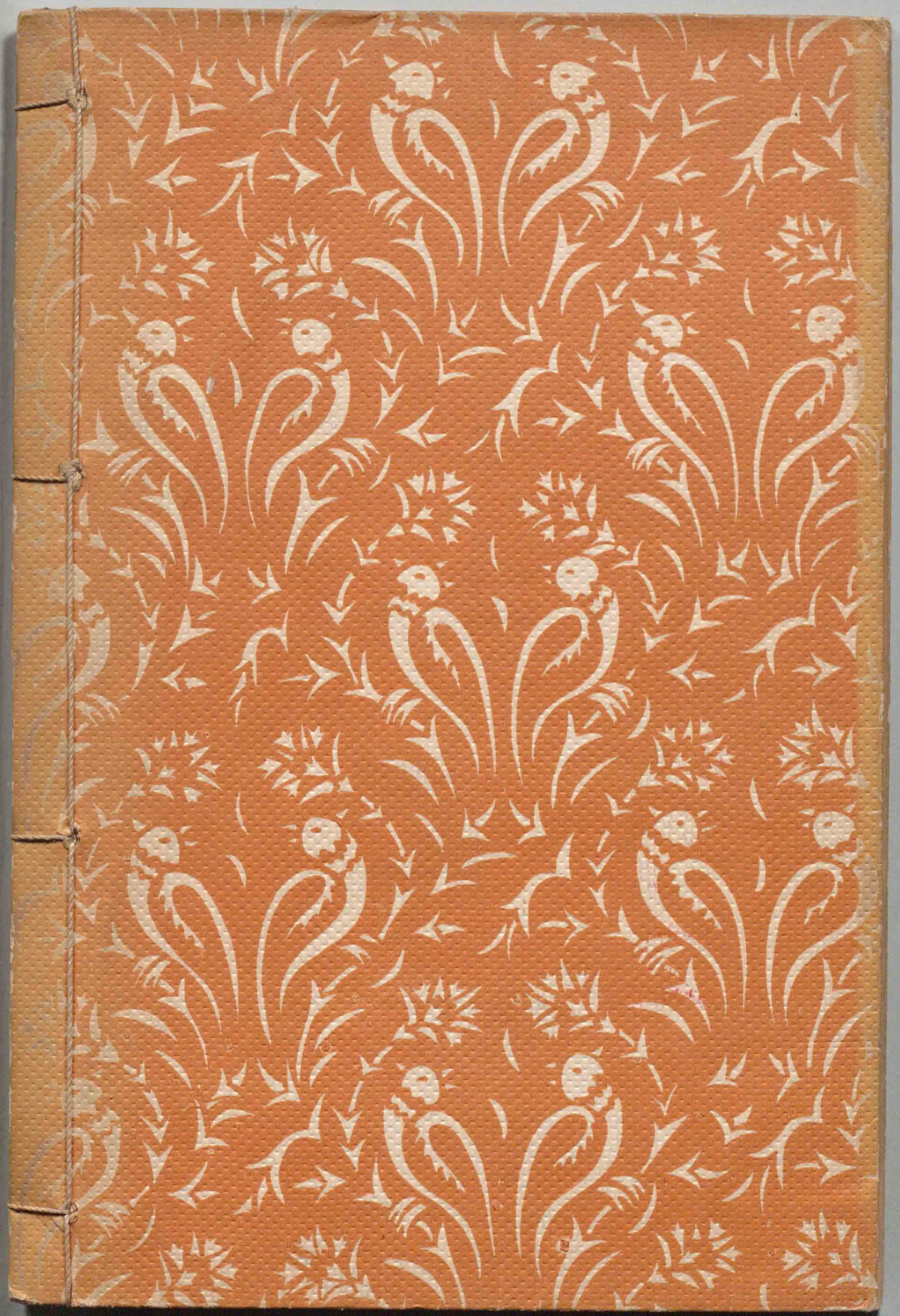
昭和副讀本　卷二終

昭和五年九月二十一日印刷
昭和五年九月二十五日發行
昭和六年一月二十四日修正印刷
昭和六年一月二十七日修正發行

昭和副讀本全五冊

卷數	定價	昭和六年度臨時定價
卷一	金參拾五錢	金五拾五錢
卷二	金參拾參錢	金五拾貳錢
卷三	金參拾五錢	金五拾五錢
卷四	金參拾錢	金四拾七錢
卷五	金參拾錢	金四拾七錢

著作權所有

著作者　東京市外中野町字大塚一六二五番地　保科孝一
發行者　東京市牛込區白銀町二十九番地　合資會社育英書院　右代表者　倉田八十八
印刷者　東京市神田區錦町三丁目十七番地　白井赫太郎
印刷所　精興社

發行所　東京市牛込區白銀町二十九番地　合資會社育英書院　振替口座（東京）七四二番
發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　日黑書店　振替口座（東京）二八〇九番